

18世紀ペルーにおける ファン・サントス・アタワルパの反乱の社会経済的背景

真 鍋 周 三

要 旨

En mayo de 1742 llegó a Quisopango de Gra Pajonal en la selva central del Perú un hombre que dijo llamarse Juan Santos Atahualpa Apu Inca Huayna Cápac. Quisopango fue la aldea en la que se fundó la misión de los franciscanos, y era territorio de Ashéninka o Asháninka. Juan Santos Atahualpa tal vez era indio, o tal vez mestizo, y debía de andar por los treinta o treinta y cinco años. Sus rasgos y su acento eran andinos, pero vestía una cushma roja como los de la selva. Predicaba a los nativos la doctrina cristiana, que leía en un libro. Y decía que esta tierra no era ni de los blancos y ni de los negros, sino de los indígenas. En Quisopango alrededor de Juan Santos Atahualpa se aglomeraban muchos Arahucos como los Asháninkas, Amueshas, Piros y Cunibos etc. El P.Fr. Santiago Vásquez de Caicedo, que se hallaba de conversor en San Tadeo en la cuenca del Perené, que recorría pasó personalmente a Quisopango, donde residía Juan Santos. Oída aquella singular cantinela, el P. Santiago Vásquez se retiró a San Tadeo. Desde aquí participó lo que pasaba al padre Comisario de Misiones. El P.Comisario comunicó lo mismo al virrey, para que pensase poner el remedio que urgía. Porque el gobierno peruano colonial tenía el presentimiento de que les amenazaba una guerra grave en la selva central, tomó la solución se enfrentarse a esta persona empleando un medio eficaz militar antes de transformarse en grupos de guerreros estos nativos. Pero ya era demasiado tarde, porque Juan Santos Atahualpa se había trasladado a Cerro de la Sal desde Quisopango y había empezado la rebelión.

En este estudio se investiga el fondo socioeconómico de la rebelión de Juan Santos Atahualpa en la selva central del Perú en el siglo XVIII. En el capítulo primero, se explica el avance del imperio de España en la selva central del Perú. Se trata de los indígenas arahuacos, el avance del poder católico español o sea el proceso de la formación de las misiones franciscanas, y después su extensión del poder profano español en la selva central. En el capítulo segundo, se enfoca la relación entre la sierra central y la selva central. Se analiza el movimiento económico en la sierra central bajo el sistema de control colonial de España, y las circunstancias de la existencia social de las indígenas serranas. Y se estudia el traslado a la selva central de las indígenas serranas forzando los cambios de la sociedad indígena. En el

capítulo tercero, se considera la forma de la resistencia de nativos selváticos contra la propagación de epidemias que ocurrían en la selva central frecuentemente. En capítulo final, se arreglan los puntos esenciales y se dice la conclusión.

キーワード：中央セルバ (Selva Central), セロ・デ・ラ・サル (Cerro de la Sal), フランシスコ会ミッション (Misiones Franciscanas), シエラ中央部 (Sierra Central), 伝染病の流行 (propagación de epidemias)

はじめに

1742年5月のことであった。フアン・サントス・アタワルパ・アプ・インカ・ワイナ・カパック [Juan Santos Atahualpa (Atahualpa) Apu Inca Huayna Cápac] と名乗る人物がグラン・パホナール (Gran Pajonal)¹⁾ のシマキ川 (río Simaqui/Shimá) 近郊に位置するキソパンゴ (Quisopango) にやってきた²⁾。キソパンゴはミッション (misión, 布教村, 伝道村) を核として形成された小村落であり, そこにはアシェニンカ [首長はマテオ・サンタバングリ (Mateo Santabangori) であった] やフランシスコ会修道士が暮らしていた³⁾。フアン・サントス・アタワルパ (以下では, 「フアン・サントス」と略称する) は原住民もしくはメスティソのセラノ (serrano, アンデス高地人) であり, 年齢は35歳から30歳くらいにあいだであったという。セルバ住民の衣装である赤いクシュマ (cushma) を纏っていた。王と自称した。ビスベキ (Bisabequi) という名のピロ人 (Piro) もしくはシミリンチ人 (Simirinchi) の長老の原住民首長を従えていた。セルバの人々は最初, この2人がシャーマンであると考えたようだ⁴⁾。フアン・サントスは短期間キソパンゴに定住した。司祭としてセルバの原住民に対応し, 毎日ラテン語で祈り, 原住民にキリスト教の教義を教えた⁵⁾。胸には大きな銀の十字架をさげ, 自ら敬虔な聖職者であると主張。またこの土地は白人 (los wiracochas), 黒人いずれのものでもなく原住民のものであると言っていた。当地では黒人は原住民にではなく聖・俗の白人に従っていた⁶⁾。当時この地域にはフランシスコ会のミッション (布教村, 伝道村, misiones franciscanas) があったほか, スペイン人所有のアシエンダ (hacienda, 大農園) やチャクラ (chacra, 農地) が多数存在していた。布教村はどれもアフリカ人の黒人奴隷によって警護されていた。まずこの黒人たちが, フアン・サントスの説教に危険な雰囲気を感じとったという。セルバの原住民の鋒先は次第にフランシスコ会ミッションの排除, フランシスコ会修道士の追放, そして布教村を護衛する黒人へと向けられていく⁷⁾。

同年5月後半, ベレネ川, グラン・パホナール, チャンチャマヨ, エネ川流域一帯のミッションにいたアシェニンカからアラワク系住民が突如集団をなして村を去り始めた。怪訝に思った修道士たちがその理由を彼らに聞いてみただけのところ, 自分たちはみんなでグラン・パホナールに行くのだと答えた。キソパンゴに到着していた「インカ」に会うためとのことであった⁸⁾。

フアン・サントスの出現に関する最初の報告がミッションに在住するフランシスコ会修道士のもとに届けられたのは1742年6月初めであった。そこで早速, サン・タデオ・デ・ロス・アンティス (San Tadeo de los Antis, ベレネ川流域に位置) のミッションのフランシスコ会士サンティアゴ・バスケス・デ・カイセード (fray franciscano Santiago Vázquez de Caicedo) が, この神秘

に包まれた「インカ」に会うためキソパンゴに出かけた。そこではフアン・サントス⁹⁾の周囲に多数の原住民が結集していた。彼の信奉者は最初のうちはアシャニンカ人 (=アシェニンカ人) (los Asháninkas, los Ashéninkas) [カンパ人 (Campa) と呼ばれた]¹⁰⁾ やアムエシャ人 [=ヤネシャ人 (los Amuesha, los Yánesha)] などの原住民であったが、しかしたちまちのうちに彼の周囲には、ウカヤリ川 (río Ucayali) 左岸の民族であるカシボ人 (los Cashibos), オテントテ人 (los Otentotes), マパリス人 (los Maparis), シミリンチェ人 (los Simirinches), クニボ人 (los Cunibos/Conibos), モチョボ人 (los Mochobos) らが結集してきたという。こうした原住民結集の背景には、キソパンゴのアシェニンカ首長サンタバングリの指示があったともいわれている¹¹⁾。そのときの様子についてバスケス・デ・カイセード修道士は次のように書いている。

「私が村に到着したとき、私は自分が、半円形をなして立っている大勢のインディオに取り囲まれているのに気づいた。『アベ・マリア』(天使祝詞。聖母マリアに幸あれで始まる祈りの言葉—筆者)と大声を上げたところ、『思い当たる罪はない』と彼らは普段通りに答えた。私が『インカはどこにいるか?』と問うたところ、彼らは私を取り巻いていた円陣を閉じ、それから私を捕らえ、所持していたトゥクマシュロの木でできたキリスト受難の像を取り上げた。そのときだった。インカが姿を現した。(中略) 彼に名前とキリスト教教義の信条を質問した。すると彼は名前をスペイン語で上手に答え、ラテン語で信条を述べた。最後に彼は私に座るように言い、インディオに食物を運ばせた。それから彼は、自分が1740年からここに到着する準備をしてきていたのだが、神が許可を出さなかった。今年になってやっと神が自分に許可を与えたので王国を組織するためにやってきたのだと言った」¹²⁾。

フアン・サントスは、ペルー副王が、王国を自分(フアン・サントス)に所有させることが最善だと語ったとバスケス神父に説明。また彼は、同族の者の支持によって帝国を安定したものにしたと述べた。フアン・サントスの意図は、インカの子孫が指導者に選ばれた後、フランシスコ会修道士をスペインに追放することであり、「新しい王国」において改宗にあたるのはイエズス会士だけである、と主張したといわれる。

接見を終えたバスケス神父はサン・タデオのミッションに急遽帰還した。フランシスコ会の上司ホセ・ジル・ムーニョス神父 (el padre Comisario de Misiones Fr. José Gil Muñoz) にあてて報告書を書くためである。この報告書を書いた直後、2人の黒人が彼のところにやってきた。両人はそれぞれ「エル・コンゴ (el Congo)」, 「フランシスコ (Francisco)」と名乗った。キソパンゴに現れたフアン・サントスに関する情報を持ってきた。この情報から、フアン・サントスがクスコから到着したこと、アンゴラやコンゴを旅した経験があることなどが判明した。この報告書や証言の記録は、ジル・ムーニョス神父によってただちにペルー副王庁に届けられた。中央セルバにおける深刻な脅威の発生を予感した植民地政府は、カヌーや徒歩によってキソパンゴに集合した大勢の原住民が戦闘集団へと変貌する前に、軍事的手段によってこの人物に立ち向かう旨の決断を下した。しかし時すでに遅かった。フアン・サントスはキソパンゴから、チャンチャマヨ地域にあるセロ・デ・ラ・サル (Cerro de la Sal) に移動し、すでに反乱を開始していたからである¹³⁾。

フアン・サントスはクスコのイエズス会出身の聖職者であり、青年期にはスペインやアフリカを旅行し、イギリスにさえ行ったことがあったという。イエズス会の庇護の下で知識を蓄えた。1729年から1730年にかけてクスコからカハマルカまでを旅し、スペイン支配の社会的不公正やスペイン人による原住民の搾取・収奪を目の当たりにしたという。1734年頃から反乱の準備に少

なくとも8年間を費やしたといわれる¹⁴⁾。16世紀初頭、スペイン人征服者に殺害されたインカ皇帝アタワルパの系統を引くアンデス高地人であり¹⁵⁾、祖先から受け継いだ王国を取り戻すためにやってきたとされている。イエズス会で教育を受け、「世界を正すために神から使わされた人」であった。彼の考えでは世界は3つの統治者の王国に分かれる。つまり、スペイン人にとってのスペイン、アフリカ人にとってのアフリカ、そして「彼の子供であるインディオとメスティソ」にとってのアメリカである¹⁶⁾。アメリカに築かれるはずの新しい秩序の理念とは圧政から原住民を解放し、彼らに所有権を与えることであった。ファン・サントスの率いる大反乱はセルバのジャングルで始まり、アンデス高地に拡大したのち、リマの占拠によって完結するはずであった。当時は、セルバに設立されたミッションから原住民を解放するのが狙いであった。反乱が始まると、中央セルバからフランシスコ会士やスペイン人事業家・商人の撤退が始まった。そして結果的には、以後1世紀以上にわたって、聖・俗の外来者である修道士や白人入植者〔以下では、「コロノ(colono inmigrante)」と略称する〕が中央セルバから全て排除されることとなった¹⁷⁾。

当初ペルー植民地政府はカヤオ（首都リマの主要港でありペルー副王領の軍事拠点）から軍隊を派遣し、タルマやハウハなどシエラ中央部地域¹⁸⁾において徴集した地方民兵部隊と合流させて反乱を鎮圧する計画であった¹⁹⁾。政府による主な軍事遠征は1742年、1743年、1746年、1750年と立て続けに行われた。しかしすべて敗北に終わった。最も大きかった打撃はおそらく1746年の遠征であっただろう。チリの原住民との戦争を経験していた新副王（第30代ペルー副王）、ホセ・アントニオ・マンソ・デ・ベラスコ、スペルンダ伯（José Antonio Manso de Velasco, Conde de Superunda. 在位1745～1761）はファン・サントスの反乱軍に対抗すべく、新しい軍事指揮官のホセ・デ・リヤマス軍司令官（General José de Llamas, Marqués de Mena Hermosa）に850人からなる中隊を伴わせて派遣したのだった²⁰⁾。ホセ・デ・リヤマスはペルーにおいて最も有能な軍事指揮官の一人とされた人物であり、かつてイギリスとの戦争にさいし、海岸部を防衛するために1万2000人の軍を指揮したことがあった。しかしとはいえリヤマスは、ファン・サントス軍に対していかなる功績をもあげることができなかったのである。討伐軍のうち生存者は挫折にうちひしがれ疲労困憊の果てにかろうじてシエラに戻るといった有様であった。コスタでは植民地政府の役人たちがジャングルにいるこのファン・サントスに打ちひしがれていた。ファン・サントスの反乱軍に対する当初の意気込みは消失していった。最終的に役人たちは、セルバの反乱者からシエラを封鎖・防衛するという守りの戦術へと後退を余儀なくされた。こうして最も厭世的な観測者が恐れていた以上に植民地政府当局にとって事態は悪化を辿ることになった²¹⁾。

中央セルバにおいて原住民側の勝利が確実となった1750年代に、タルマとハウハのシエラ中央部では政府側陣地として、訓練された騎兵、歩兵からなる5つの中隊が地方民兵軍の支援を受けて反乱軍と対峙していた。シエラとセルバの境界沿いに政府側の要塞が設けられ、歩哨のパトロール隊が警備にあっていた。タルマとハウハのコレヒドールには高度の軍事訓練を受けた将校が副王によって配置された。しかしその後数度にわたってセルバに派遣された討伐軍がファン・サントス軍に勝利することは遂になかった。だがしかし、ファン・サントス軍によるシエラの占拠だけはかろうじて阻止しえたのであった。

ファン・サントスの反乱の舞台となった地域は、狭義には現ペルーのフニン県チャンチャマヨ郡、サティボ郡、パスコ県オクサパンパ郡に及ぶ。また広義には現ペルーの7つの諸県にまたがっている。反乱拠点は中央セルバのさまざまな原住民領域を包含し複雑な地形を構成している。ア

ンデス東斜面からアマゾン川源流域（アマソニア大平原、小規模な山群や台地、河間地帯）である。そこではさまざまな経済空間が連結されていた。

ペルーにおいてフアン・サントスの反乱調査に目が向けられたのはそう古いことではない。この反乱研究のための有益な文書がフランシスコ・ロアイサ（Francisco A. Loayza）によって整理され刊行されたのは 1942 年のことであった²²⁾。ロアイサは 1930 年代に、失われたアンデスの過去を立証するための調査・研究に尽力した。1940 年代以降のペルー・ナショナリズムの高揚は、国民意識の覚醒に向けてペルー独立の先駆者（Los precursores de la independencia del Perú）を模索するところとなり、18 世紀アンデスにおける反乱の指導者に大きな関心が注がれ始めた。フアン・サントスの反乱の研究はこれまで、フランシスコ会による布教活動の文脈において考察されることが多かった²³⁾。フアン・サントスの運動をフロンティア（開拓地と未開拓地の辺境地帯）の反乱と考える立場である。その場合、多様な原住民民族が統合されたこの運動の「原住民ナショナリズム」のイデオロギーの探求が重要となる。また、シエラから中央セルバに避難してきたアンデス高地原住民〔serrano/indígenas de los Andes. 以下では、「セラノ」と略称する〕との関係に注目する視点も少なくない。シエラとの連帯をはかった人物としてフアン・サントスを重視する立場からは、18 世紀ペルー・シエラにおいて高まる反乱潮流への寄与が取りざたされることになる²⁴⁾。

多くの研究者がフアン・サントスの反乱に言及しているものの、その本質にせまるような研究はまだ少ないといえよう。研究者は近年では、ペルー中央セルバ地域の地理や歴史に詳しいパナマのスミソニアン熱帯研究所（Smithsonian Tropical Research Institute）のフェルナンド・サントス・グラネロ（Fernando Santos Granero）やフレデリカ・バークレイ・レイ・デ・カストロ（Frederica Barclay Rey de Castro）、レーネルツ・ジャイ・フレデリック（Lehnertz Jay Frederick）、パブロ・マセラ（Pablo Macera）、エンリケ・カサント（Enrique Casanto）をはじめとして、ペルーはもとよりヨーロッパや米国などに分散している²⁵⁾。わが国では植民地時代アンデス史研究者の間でこの反乱がよく話題に上るものの、友枝啓泰の記事²⁶⁾がある程度にとどまる。

この反乱の研究がほとんど進まないのは、研究のための史料が限られていることに大きな原因がある²⁷⁾。また中央セルバという辺境の場所柄もあり、現地調査が難しいなどの事情もある。まだ未知の分野といっている。

本稿では、中央セルバを拠点にフアン・サントスの反乱が形成されるに至った社会経済的背景を、限られた資料をもとに検討し整理することにとどめる。第 I 章では、中央セルバにおけるスペイン植民地支配の進出について、中央セルバの原住民に言及した後、教権の中央セルバ進出、すなわちフランシスコ会ミッションが形成された経緯と、その後、俗権の中央セルバ進出が行われた事情を考察する。第 II 章では、シエラ中央部と中央セルバとの関係に焦点をあてる。スペイン植民地支配体制下におけるシエラ中央部の経済動向を分析し、シエラ原住民の社会的生存の実態を明らかにする。シエラ中央部の原住民社会が変容を強いられていく中で、シエラ原住民の一部が中央セルバに移動していった状況を考察する。第 III 章では、度重なる伝染病の流行に対するセルバ原住民の抵抗の形態をみていく。最終章では、これまでの要点を整理し結論を述べる。

I 中央セルバへのスペイン植民地支配の進出

先スペイン期からシエラ（中央部）と（中央）セルバの間にはそれぞれの産物や文化面での交流システムが存在していたことが近年知られるようになった。スペイン人が植民地支配体制にセルバの人々を併合することによって生じる利益に目を付け、そのシステムの再現を目論んだとしても不思議ではない²⁸⁾。

コスタ（沿岸部）からシエラ（山岳部）にかけては、征服以降、スペイン植民地支配が原住民労働力収奪の機構を土台とし、原住民に対する搾取を生みだしてきたことは周知のところである。18世紀のペルー副王領においては原住民の再生産システムが大きく侵害され破壊されていた。とくにシエラでは原住民の対応能力は18世紀以降限界状況に達していた。そのさい、原住民をスペイン支配に包摂するうえで強制力を行使したのがコレヒドール（corregidor. 地方行政官）であった。王権の代行者としてコレヒドールは地方（provincia）を支配した。18世紀ペルー副王領では、横領、汚職、虚偽、脱税、略奪等の「不正」が蔓延したが、その原因の多くがこのコレヒドールによるものであった²⁹⁾。

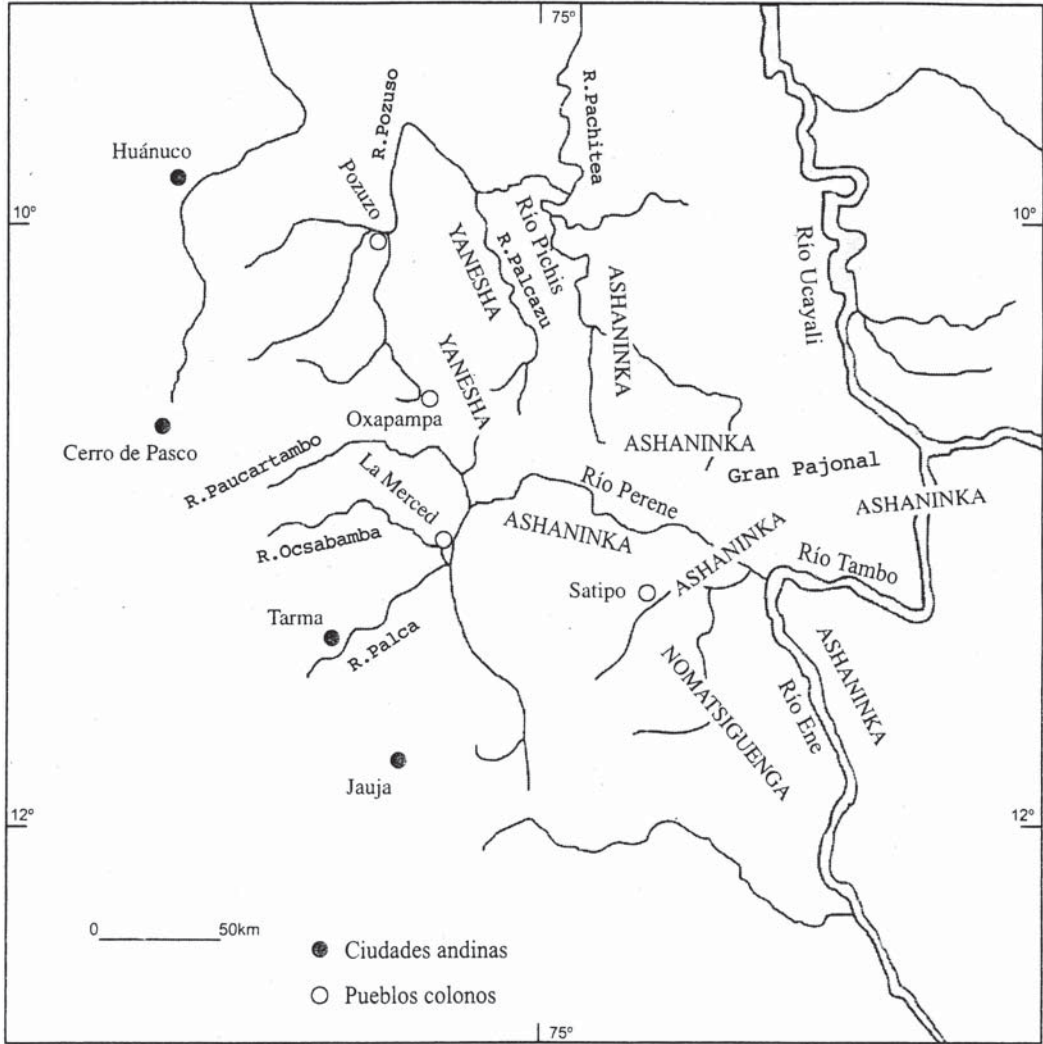
しかしコスタやシエラとは異なり中央セルバ（Selva Central. 「セルバ」とは「アンデス東方アマゾン川源流域の森林部」）では、植民地支配がまだ及んではいなかった。17世紀になって各派修道会によるミッションの触手が伸びていく。中央セルバにスペインの支配が及んでいくのは実質上18世紀に入ってからであった。以下では中央セルバにおけるスペイン植民地支配拠点の形成を考えるため、3つの項目を設け考察していく。

1. 中央セルバの原住民

ペルーの東部低地はセルバとよばれる亜熱帯・熱帯雨林地帯である。そこはアンデス山脈とアマゾンアとの中間地帯であるが、平坦な低地ではない。複雑に張り出した山脈、ポソ川（río Pozuzo）、パルカス川（río Palcazu）、ピチス川（río Pichis）、パチテア川（río Pachitea）、ペレネ川（río Perené）、アプリマック川、エネ川（río Ene）、タンボ川、ウカヤリ川（río Ucayali）などの曲がりくねった河川、峻厳な渓谷によって地形は複雑に分断されている（地図1参照）³⁰⁾。これらの河川流域に住むアラワク系原住民（los arahuacos）³¹⁾の中で飛び抜けて人口規模の大きいグループはアシャニンカ（＝アシェニンカ）〔スペイン人は彼らを「カンパ」と呼んだ³²⁾。アラワク系（Arawak）言語を使用〕³³⁾である。

中央セルバの領域は広大であるが、その西方（シエラ中央部の東端からセルバにかけて）はとくに中央セルバ高地（Selva Alta Central）〔もしくはセハ・デ・セルバ（Ceja de Selva）〕と呼ばれる（現ワヌコ県、パスコ県、フニン県、アヤクチョ県の東方地帯）³⁴⁾。この地域にはアラワク系原住民の中でも、とくにアムエシャ（＝ヤネシャ。以後、本稿ではその名称を「アムエシャ」に統一する）、アシャニンカ、ノマチゲンガ（los Nomachiguenga）などの原住民集団が暮らしていた（各集団のおおよその居住地は地図1参照）³⁵⁾。

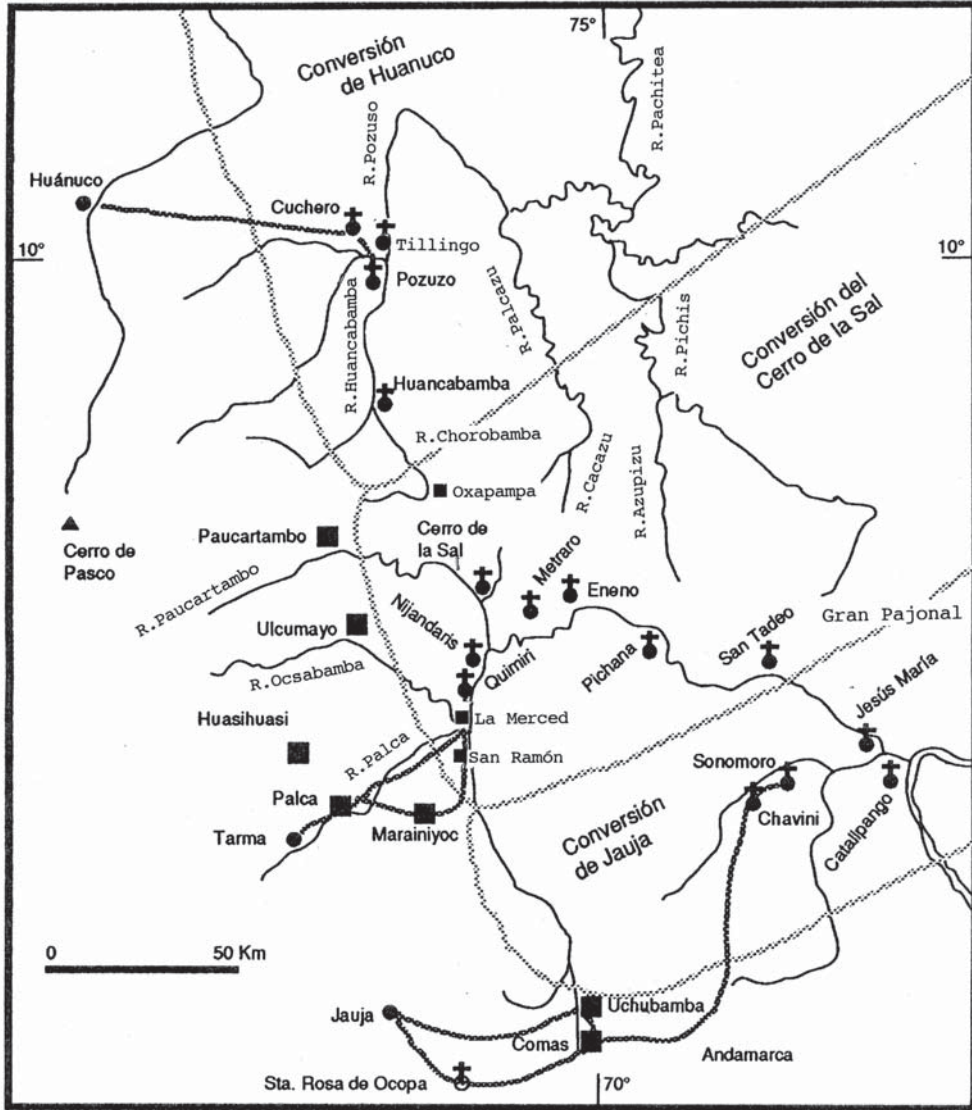
中央セルバには先スペイン期からアラワク系原住民が集っていた重要な場所がある。それはチャンチャマヨ谷（現フニン県チャンチャマヨ郡）に位置するセロ・デ・ラ・サル（Cerro de la Sal. 「塩の山」という意味。そこは昔からアムエシャの居住区域であった）である³⁶⁾。セロ・デ・ラ・サルはチャンチャマヨ川とペレネ川の合流点のちょうど北側、より正確にはパウカルタンボ川（río



地図1 中央セルバの主要なアラワク系原住民の居住地

出所：Fernando Santos Granero, “San Cristóbal en la Amazonía: colonialismo, violencia y hechicería infantil entre los arahuacos de la selva central del Perú.” en *Anthropologica* (del Departamento de Ciencias Sociales de la Pontificia Universidad Católica del Perú), Año XXIII, No.23, diciembre de 2005, p. 45.

Paucartambo) とエンタス川 (río Entaz) の合流点 (地図1 及び地図2 参照³⁷⁾) に位置しており、赤みがかった塩の岩脈があったことで知られる。セロ・デ・ラ・サルはその名前からも明らかのように、食物の味付けに欠かせない品であり食物の保存に必要な塩の産地であった。セロ・デ・ラ・サルには先スペイン期から、アムエシヤの他にアシャニンカ、コニボ、ピロの人々が集い、塩を採掘し、塩の取引に従事していた。この取引は民族誌学的には「アヨンパリ (ayómpari)」と呼ばれ、セロ・デ・ラ・サルを中心に地域ネットワークが構成されており、とくに綿布、バニラ、羽毛、毛皮、そしてシエラからもたらされる青銅器具の取引が行われていた³⁸⁾。そこはまたアラワク系原住民



凡例	
●	コレヒミエントの支配拠点
■	要塞化された境界の村
▲	鉱山
⊕	ミッションの学院
⊙	ミッション村
~~~~~	改宗境界
—	到達路

地図2 1730年、中央セルバの改宗区のミッション村とそこへの到達路

出所：Fernando Santos Granero, Frederica Barclay Rey de Castro, *Ordenes y desórdenes en la Selva Central, historia y economía de un espacio regional* (Lima: IEP, IFEA: Instituto Francés de Estudios Andinos, 1995), p. 39.



アマエシヤにとって儀式上重要な聖地でもあった³⁹⁾。

中央セルバは固有の生態学的宗教的民族な性格をもったアラワク系原住民が暮らす土地であり、シエラとはあらゆる点で異なっていた。複雑に入り組んだ河川や山道を経て人々は往来していた⁴⁰⁾。

先スペイン期において中央セルバはインカの支配を受けてはいなかった。またスペイン人によるインカの征服以降、17世紀に入ってからでもスペインの支配は及んでいなかった。副王領の首都リマ市に最も近いセルバであったにもかかわらず、中央セルバをめぐる「関心の欠如」を説明するのは容易ではない。アマゾン川源流域住民とアンデス高地住民の間には長期におよぶ接触の証拠が存在するけれども、両者間で交流や交易が定則化されていたようにはみえない。シエラからセルバへのミティマエス (mitimaes, 移民) の派遣とか、交易などの調査・研究が待たれるところである⁴¹⁾。

17世紀半ばにおける中央セルバの原住民社会の様子を断片的にはあるが少しみてみよう。軍人冒険家の大尉ペドロ・ボオルケス (capitán Pedro Bohórquez) によって1650年頃に書かれた記録文書から、その該当箇所を要約して示す。

「河川の流域や湖沿いには長さが2レグア (legua, 距離の単位。1レグア=5.6キロ) の4ブロックもしくは5ブロックほどの規模の大きな定住地があり、人々は密集して暮らしている。原住民は筏やカヌーに乗って、品物を獲得するため長期間におよぶ遠征に出かける。品物を交換するという関係はアシャニンカの間には強力な連帯を生む。他者との関係はすこぶる穏やかで家庭的な付き合いである。アマゾンの原住民は知的で創意に富み、強く筋骨たくましい。肌は山人地人よりも白く、ひげを蓄えている。勇敢で威厳がある。かといって寛大さを忘れない。盗み、略奪、不倫などを忌み嫌う。大半の者が綿のトゥニカス (túnicas) をまとっているが、首長は、形が変化に富んだ多彩色の綿の織物を身につけている」「アマソニアの原住民はその年長者や身分の高い者に対しては従順である。規則に従って統治が行われている。警察の機能もある。4地方から5地方の広大な地域を統治するリーダーがいる。これに大勢が仕えている」などと述べている。

またボオルケスは、一人の君主の存在を人々が認めていると確信した。しかし彼はこの君主がいったい誰なのかは語っていない。それは「アマソニアに亡命するインカ」という歴史的題材が彼の脳裏をかすめていて、そう書いたのかも知れない。スペイン人たちの脳裏に刻印されていた過去の記憶、つまりエルナンド・ピサロ (Hernando Pizarro) に対して反乱を起こし1536年にセルバに逃亡したマンコ・インカ (Manco Inca) の末裔なのかもしれない。ともかく、低地のこの謎の君主がインカの子孫にちがいないとしてボオルケスの心を揺さぶったとすれば、興味をそそる⁴²⁾。

## 2. 中央セルバに対する関心の高まりと教権の進出：フランシスコ会ミッションの形成

17世紀以降スペインは「教権」の力、すなわちカトリックの布教・伝道活動を通じて中央セルバへの侵入を試みるのだった⁴³⁾。それに先だってスペインはアンデス東斜面の開拓を行った。アンデス東斜面にはアシエンダが設けられていき、17世紀以降その生産物は、リマ市をはじめ、セロ・デ・パスコやワンカベリカ市などシエラ中央部の鉱業都市などの大市場に供給された。

リマ市の東方に位置するワヌコ地域にスペイン人征服者が到来したのは、1540年代以降のことであった。1542年にはワヤガ川上流 (río alto Huallaga) にワヌコ市 (la ciudad de León de

Huánuco. 副王領で3番目に築かれた都市。シエラ中央部の中核都市として18世紀初めまで繁栄した)が建設された。1580年には修道士アンドレス・コルソ (fray Andrés Corzo) によってワヌコ市にフランシスコ会修道院 (Convento de Compañía u Orden de San Francisco) が建立された⁴⁴⁾。その後ワヤガ溪谷 (valle de Huallaga) に目が向けられていく。1587年にフランシスコ会士 (los franciscanos) はタルマを拠点に約3万人のシエラ原住民に洗礼を施したという⁴⁵⁾。一方、イエズス会も布教・伝道活動を始めており、1559年頃ハウハやアンダマルカ (Andamarca) に到着している⁴⁶⁾。ハウハ地方は豊かなマンタロ谷を背景として大量の農産物を得ていた。中央セルバに近いアンデス東斜面では16世紀後半からスペイン人による拠点づくりが行われた。ハウハ地方東部にコーマス (Comas) やアンダマルカなどの町がつくられた。アンダマルカは中央セルバの原住民からもよく知られていた。ペレネ川流域やパンゴア川下流域 (la cuenca del bajo Pangoa) に住むアシャニカの避暑地でもあった⁴⁷⁾。しかし中央セルバのチョンタバンバ、パウカルタンボ、チャンチャマヨ、ペレネ、サティポなどの地域はまだ未知の空間であった。ペルー・セルバ全体を俯瞰したとき、セルバにおける最初のスペイン人居住地は金の鉱床があるところに出現していた。しかし中央セルバでは金の鉱床は見いだされず、1650年頃この地域を探検したペドロ・ボオルケスの遠征はともかくとして、中央セルバに関心を示す俗人はほとんどいなかった⁴⁸⁾。

教権の進出について見ていこう。中央セルバに教権の触手が伸びたのは1635年のことであった。この年フランシスコ会宣教師 (misionero franciscano) のヘロニモ・ヒメネス修道士 (fray Jerónimo Jiménez) が、ワンカバンバ (Huancabamba. アンデス東斜面の村。当地にはアムエシャが多く住む。ミッションが築かれた) 経由でセロ・デ・ラ・サル近郊キミリ (Quimiri)⁴⁹⁾ に到着し、最初のカトリック・ミッションを立ち上げたのである。中央セルバにおけるフランシスコ会ミッション第1号、「キミリ・ミッション (la misión de Quimiri)」の誕生である。翌年には礼拝堂 (capilla) をもつ村が建設された⁵⁰⁾。ヘロニモ・ヒメネス修道士の行動は、ワヌコのクリストバル・ラリオス修道士 (fraile Cristóbal Larios) の要請に基づくもので、食糧品獲得の狙いもあったといわれている。セロ・デ・ラ・サルがスペイン人によって征服され、そこに「サン・ミゲル・アルカンヘル (San Miguel Arcangel)」と呼ばれる町が建設されたのは、その後1649年のことであった。大尉アンドレス・サルガド・デ・アラウホ (capitán Andrés Salgado de Araujo) らカビルドに役職を有するおよそ50人のスペイン人がそこに住み着くことになった⁵¹⁾。1670年頃までにフランシスコ会ミッションはマサマリ [Masamari = パンゴア (Pangoa)] とセロ・デ・ラ・サルを中心に、セルバ原住民の改宗をかなりな程度達成していた。宣教師がセロ・デ・ラ・サルに着目したのは、先にも述べたようにそこが中央セルバ原住民の交易中枢だったからであり、中央セルバのほぼ全域の原住民が集まってきたためである。当地での布教・伝道活動を通じて、やがてフランシスコ会はアシャニカの密集地であるグラン・パホナールの存在を察知したようである。またペレネ川を下るとエネ川との合流点に出られることが、1674年にマヌエル・ビエドマ神父 (padre Manuel Biedma) によって観測された。グラン・パホナールに到達するためにも、ペレネ川流域にミッションを広げる必要性が生じた⁵²⁾。(グラン・パホナールにフランシスコ会宣教師が到着し、布教・伝道を試みたのは1730年代に入ってから)

話を1635年に戻す。ヘロニモ・ヒメネス修道士の精力的な布教活動の一方で、キミリ・ミッションを拠点に中央セルバの原住民支配をもくろむスペイン人兵士の強引な行動が引き金となって、宣教師殺傷事件が発生する。1637年12月8日、ヒメネス修道士とラリオス修道士らはペレネ川

流域において新たなミッションを設けるために奮闘中、悲劇に見舞われた。ヒメネスを含めて修道士全員が当地の原住民によって殺害されたのである⁵³⁾。この殉教のニュースがタルマに届けられると、新たに3人の宣教師がキミリ・ミッションに到着し、セロ・デ・ラ・サルを拠点に布教活動を継承する。当時チャンチャマヨ川流域には6つの集住区(reducciones)が設けられつつあった。ところが今度はキミリにおいて、この3人の聖職者が原住民により殺害されてしまう。1645年にはさらに2人の修道士が犠牲になった。これらの結果、1673年までにセロ・デ・ラ・サル付近のミッションのいくつかが放棄された⁵⁴⁾。その後、ウカヤリ川のミッションからマヌエル・ビエドマ、フアン・オヘダ(fray Juan Ojeda)という2人の修道士がキミリに到着し、道路建設に尽力したことが知られる。それからさらに数人の修道士が彼らに合流し、アシャニカ(カンパ)語の文法書、信仰教書づくりが行われたという。1674年9月には再び宣教師殺害事件が数度にわたって発生した⁵⁵⁾。

しかしこうした難局にもかかわらず、キミリとワンカバンバのミッション(いずれもアムエシャ領域)は生き延びた。当時その運営は在俗司祭[=セクラーレ(clero secular)]に任されていた(1699年には再びフランシスコ会士の手に戻される)。

ミッションが流血の事態からいったん解放されたのは18世紀に入ってからである。フランシスコ会士フランシスコ・デ・サン・ホセ(ホセフ)(padre Francisco de San José, Joseph)の尽力による。この著名な修道士は1716年からハウハ谷(el valle de Jauja)のオコパにおいて修道院(el Convento de Santa Rosa de Ocopa)ならびに宣教師学院(Colegio de misioneros de Ocopa)の建設に着手した。オコパ修道院が完成したのは1725年であった。以来、このオコパ修道院が中央セルバへの布教基地となった。この修道院から多くの探検隊(expediciones exploratorias)やフランシスコ会宣教師(misioneros franciscanos)が中央セルバに向けて出発した。セロ・デ・ラ・サルはもとより、アンデス東方に建設されたミッションを指揮し、ウカヤリ川流域をも含めた東部低地をその指揮下においたのであった⁵⁶⁾。

フランシスコ会の中央セルバ進出がアラワク系原住民の武力抵抗によって中断された理由は何だったのか。その最大の理由の一つは、シエラから到来した人々と接触した原住民がしばしば伝染病の急襲を受けたことである。医学や科学がそれほど進歩していなかった当時、伝染病の流行が外来者の悪行と原住民に判断されたとしても不思議ではない(伝染病の流行については第三章で述べる)。

ところで、17世紀半ばにスペイン王室(Corona española)がペルーの未征服地域を服従させるために情報収集を依頼したのは修道会宣教師や軍人冒険家(aventurero militar)であった。植民地政府にとって当時のアマソニア(Amazonia, アマゾン川流域)は未知の空間であった。フランシスコ会修道士フランシスコ・デ・アンドラーデ(padre Francisco de Andrade)によって書かれた記録文書は、スペイン人によるアマソニアについての最初の証言である⁵⁷⁾。

当時イエズス会(Compañía de Jesús)とフランシスコ会は、アマソニアを征服しようとするスペイン王室の援助を得るために競い合っていた(軍人冒険家もまた彼らのライバルであった)。イエズス会はもっぱらマラニオン川上流域(río alto Marañón)とワヤガ川上流域(一部ウカヤリ川流域を含む)に重点を絞って中央セルバ進出をもくろんでいた⁵⁸⁾。イエズス会とは異なってフランシスコ会は托鉢修道会であり、所有地をもたず、商業や事業に手を染めることもなく王権に対して絶対的服従を誓っていた。アマソニアに足を踏み入れたフランシスコ会は国王から報酬を受

け取り、それによって修道院運営の費用をまかない、ミッションを維持・管理し、新たな福音伝道に向けて遠征隊を送り出すのだった。この金銭的援助と引き替えに王室は、新天地の情報提供をフランシスコ会に要求した。会士はスペイン帝国の辺境地帯にいる住民を精神的に征服するという役割を担ってスペイン王室の代行者として働いた。

1662年にフランシスコ会士によって書かれた報告文書がある。少し長くなるが内容を紹介する。ペルーにおけるフランシスコ会の統括官である神父フランシスコ・デ・アンドラーデの手になるもので、ワヤガ川やウカヤリ川流域の事情をスペイン国王に通知するために書かれたものである。アンドラーデ神父の意図は、フランシスコ会に対する国王からの経済的支援を確保することであり、新天地の住民を福音教化するための許可を手に入れたいとの一心である。アマソニアをペルー副王領に編入することによって得られる、多大な利益について書かれている。そしてフランシスコ会だけがこの目的を達成できると力説している⁵⁹⁾。

異教徒の住む地にカトリック信仰を広めようとする宣教師の手になるこの文書には、アマソニアについての生態学的特徴が記され、シエラのそれとの相違が語られている。フランシスコ会の拠点であるワヌコ市の快適な気候や居住環境との比較がなされ、セルバの様子が述べられている。険しい地形や猛暑などが指摘されている。東に進むと広い高原をウカヤリ川が流れており、同行していたスペイン人兵士がアマソニアの耐え難い自然環境のせいで希望を失っている様子なども読み取れる。セルバの自然環境を厳しく不快なものとして描いている。

一行はワヌコの町から16レグア（約89キロ）の地点にあるワヤガ溪谷でインカ人が残した遺跡・城壁に遭遇している。またウカヤリ川左岸に住む先住民が未知の言語を話し、一夫多妻制で暮らしていることや呪術師の存在などについて報告している⁶⁰⁾。しかし先スペイン期から存在していたであろう、シエラと東部低地間の交易については述べられていない。しかし神父は、スペイン人の支配から逃れるためにシエラのビルカス（Vilcas）地帯からセルバに逃亡した家族の子孫や、彼らがセルバにもたらした品物（多彩色の皮、織物のスカーフ、サンダルなど）に言及している⁶¹⁾。

アンドラーデ神父の記録の中に重大な記述がある。1646年にフランシスコ会宣教師たちがパヤンソス（Payanzos）においておよそ1万人の原住民に洗礼を施したけれども、16年後この人口が1300人にまで減少したこと、生まれた子供の多くが成人に達する前に死んでしまったことが述べられている点である。しかし神父は、原住民の人口減少をヨーロッパ人がもたらした伝染病⁶²⁾と関連づけてはいない。あくまでも運命と決めつけている。

しかしながらこの伝染病の蔓延による人口減少以降、フランシスコ会が改宗に成功した原住民の数はそれほど多くはない。アンドラーデ神父はフランシスコ会による布教が成功したとスペイン王室には伝えているけれども、セルバの原住民が本質的には難攻不落で野性的、手に負えない住民であるとみなしていたことは間違いない⁶³⁾。

話をオコパ修道院建立時に戻す。オコパ修道院は中央セルバをワヌコ、タルマ、ハウハ3つの改宗区（conversiones）に分けて布教することにした。セロ・デ・ラ・サルはタルマ改宗区（la conversión de Tarma）の下におかれた⁶⁴⁾。各改宗区はそれぞれレドゥクシオン（原住民の集住政策）を行った。各レドゥクシオン（原住民集住区）は、原住民村落（pueblo）であると同時に布教村（misión）でもあるという2つの概念によって組織された。「村落」としての統治は一人のスペイン人大尉（capitán）に、また「布教村」としての管轄権は1人のフランシスコ会士に委譲された⁶⁵⁾。

このようにして中央セルバにおけるスペイン植民地支配拠点の設立が行われた。集住化政策の過程で殉教者も出たけれど、レドゥクションは次々と設けられていった。主なものを挙げてみよう。まずもってポスゾ川流域には1726年から1735年にかけてポスソ(Pozuzo)、ティリング(Tillingo)、クチェロ(Cuchero)の各ミッションが設立された⁶⁶⁾。エネ川南方にはサン・アントニオ・デ・カタリパンゴ〔San Antonio de Catalipango. 1729年に設立。ペレネ川とエネ川の合流点からエネ川を南に少し遡上した地点(より正確にはパンゴア川流域)に位置する。以下、「カタリパンゴ」と略称する〕やヘスス・マリア(Jesús María. 1723年に設立。ペレネ川右岸に位置する)が、ペレネ川右岸にはサン・タデオ・デ・ロス・アンティス(San Tadeo de los Antis. 1727年に設立。以下、「サン・タデオ」と略称する)が、キミリとセロ・デ・ラ・サルの間にはニハンダリス(Nijandaris. 1715年に設立)が、そしてその東方にはメトラロ(Metraro. 1715年に設立)とエネノ(Eneno. 1715年に設立)などのミッションが設けられた(地図2参照)⁶⁷⁾。

次にグラン・パホナル地域⁶⁸⁾への布教についてであるが、当地にフランシスコ会が進出したのは1730年代に入ってからである。1734年にリマのフランシスコ会本部のフアン・デ・ラ・マルカ修道士(fray Juan de la Marca)らによる報告文書には、「新天地グランデ・パホナル」への布教が記されている。20人の宣教師が当地に送り込まれたことへの言及がある。1727年に設けられたサン・タデオのミッション(グラン・パホナルとチャンチャマヨを結ぶ幹線道の中継地点に位置)がグラン・パホナルへの布教拠点となった。同年にフアン・デ・ラ・マルカ修道士はエネ川とペレネ川の合流点に進軍基地を設けた後、1729年頃からグラン・パホナルのアシャニンカと接触を開始した。彼はまず原住民リーダーを改宗させるため、サン・タデオに彼らを集め、エネ川ミッションの改宗カシケであるマテオ・デ・アシア(Mateo de Assia)に改宗の仕事を依頼した。マテオ・デ・アシアはグラン・パホナルから来ていた172人のアシャニンカに改宗を試みた。しかししばらくすると、この原住民の間に伝染病が流行し40人が死亡した。残りの人々は1730年末にサン・タデオを棄ててグラン・パホナルに帰ってしまった。1732年にフアン・デ・ラ・マルカ神父は、サン・タデオのミッションにグラン・パホナルのカシケを何度も招き、そこで鉄製道具などを贈って改宗を試みた。しかしサン・タデオにおける改宗の可能性は潰えた。サン・タデオを訪問するたびにグラン・パホナルの原住民が死亡したからである。そこで1733年4月に神父は15人の改宗アシャニンカを連れて、サン・タデオからグラン・パホナルに到着し、タンピアニキ(タンピアニ)(Tampianiqui/Tampiani. Nuestra Señora del Puertoとも呼ばれた)に最初のミッションを設立したのである。引き続きウベニキ(Ubeniqui, Unini)川(río de Ubeniqui/Unini)流域にサン・フランシスコ・ソラノ・デ・アポロキアキ(San Francisco Solano de Aporoquiaqui. 以下、「アポロキアキ」と略称する)のミッションを建立した。この最初の訪問で彼は多くの原住民に洗礼を行うことができた。彼はまた、ハビロシ(Javiroshi, Sabiroski)、パウティ(Pauti, Pautiq)、キソパンゴ、シマキ(シマ)に伝道士を配置しアシャニンカの改宗に努めた。1733年6月、サン・タデオに戻った彼は、それから、サン・タデオ、カタリパンゴ、アポロキアキを結ぶ三角地帯において積極的に布教活動を続けた⁶⁹⁾。

1735年にマテオ・デ・アシアが訪れるまでグラン・パホナルへの訪問者はなく、新たにミッションも築かれなかった。ミッションを受け入れる住民の主な動機は宣教師がもたらす贈り物であったといわれる。ヨーロッパ産の品、とりわけ鉄製器具の入手が狙いであった。フアン・デ・ラ・マルカ神父の遠征によって、遠くて近寄り難い場所というグラン・パホナルの神秘性が取

り除かれ、そこは布教の可能性を秘めた場所に変わった。1736年にハウハ改宗区のアロンソ・デル・エスピリツ・サント神父 (padre Alonso del Espíritu Santo) の一行は、ソノモロのミッション (la misión de Sonomoro) に立ち寄った後、カタリパンゴから、ウカヤリ川流域にあったクニボのサン・ミゲル・ミッション (la misión de San Miguel de los Cunibos) まで河川を航行した。帰路としてウカヤリ、タンボ、エネ川を遡上することを中止し、グラン・パホナルからの帰路を、ウカヤリ川河口ウニニ (Unini) へと通じるチパニ渓谷 (Quebrada Tsipani/Chipaniki) に求め、ペレネ川沿いのサン・タデオのミッションまで徒歩で戻り、そしてそこからカタリパンゴへは舟を利用して帰った。3番目に行われた遠征では、グラン・パホナル北部を横断するアシャニカの交易路が採用された。アロンソ神父はピリントキ (Pirintoki) の近くにミッションを設立した。帰路は西方に向かいサン・タデオに戻った。1739年までにフランシスコ会士はグラン・パホナルの10か所にミッションを作ろうと望んだ。その仕事の一部は、タンピアニキを基地として改宗アシャニカによって実現された⁷⁰⁾。

中央セルバにおけるミッションの総数と原住民改宗者の規模、宣教師の人数に関して、アロンソ・サルサル (Alonzo Zarzar) の指摘がある。ファン・サントスの反乱が開始された時点で、フランシスコ会士がその支配下においていたミッション数は32村であり、タルマとハウハ地域の場合、1ミッション当たり平均300人の改宗者がいたから、全体で9000人余りと算定した。また宣教師の人数については、1736年頃には40人近い宣教師が布教に努めていたとしている⁷¹⁾。

ところで、フランシスコ会士たちは当初、主に鉄製工具 (刃物、鍋等) などの贈り物を利用して原住民リーダーとの友好関係を築き、布教区へのセルバ原住民の集住をはかった。しかしその後、冶金の技術が修道士によってセルバ原住民に伝えられる (冶金の技術はセラノの間でも知られていたから、セラノがこの技術をセルバ原住民に伝えた可能性も否定できない) と、鉄製工具の生産が原住民の間に急速に広がった。とりわけアムエシャの間では祭事センターに鉄の鑄造・鍛冶場が設けられ、冶金の技術がコルネシャ (Cornesha. アムエシャの伝統的な政治・宗教上のリーダー) によって発展させられた。祭事場と鍛冶場の最大の結合地点はメトラロ (1742年から少なくとも1756年までにかけてファン・サントスが防塞を築いた村) であった。そこでは原住民によって工具 (斧、ナイフ、マチェテ、針) や武器 (鎌) の生産が行われるようになった。これらの鉄製品が、聖職者の殺害や反乱のさいに使用されたことはいうまでもない。鉄の鑄造・鍛冶場の多くはセロ・デ・ラ・サルスの周辺に見いだされるが、それは、パウカルタンボ川にあった鉄の鉱床 (los yacimientos de hierro) への接近が地理的に容易であったという事情と結びついていたためである。セロ・デ・ラ・サルは、中央セルバ原住民の大半を結びつけた。先スペイン期から塩はセルバ原住民を魅了する重要な品であったが、これに鉄製器具という新要素が加わることによって、セロ・デ・ラ・サルスの経済・商業上の価値は以前にも増して高まった。と同時に、このアムエシャ領域は中央セルバ原住民の紐帯をいっそう密接なものにしたのであった⁷²⁾。

### 3. 俗権 (俗人) の中央セルバ進出

16世紀半ばからワヌコ市を拠点に、コカの獲得を目指して東方への関心が高まっていた。しかし中央セルバに俗権 (俗人) の手が入っていくのは17世紀以降のことである⁷³⁾。俗権のセルバ進出の動機を知るうえで、軍人冒険家ペドロ・ボオルケス大尉によって書かれた記録がここでも役に立つ。1649年にフランシスコ会がワヌコから中央セルバに向かって活動を広げていたとき、

大尉ペドロ・ボオルケスはペルー副王にあててアマソニアへの遠征許可を求める嘆願書を書いた。そこには「エル・ドラード」探求の情熱がうかがわれ、17世紀半ばのアマソニアが富や名声、栄光を渴望した軍人も魅了していた様子が見て取れる。ボオルケスはかつてセルバを探検した経験があった。しかし前回の遠征では植民地政府の許可を得ずに富の探索を試みたのだったけれども、今回の正式な遠征表明ではセルバ原住民を服従させることによって得られる計り知れない富に照準が絞られている。遠征費用を自分が全額負担する代わりに、将来セルバにおいて自らが営む予定の事業に備えて特権を認めてもらおうというのである。先述のフランシスコ会神父が描いたのとは対照的にアマソニアの豊饒たる自然資源について書かれている。「エル・ドラード」への言説に満ちている。まずもって金、銀、宝石、それから「植物王国」、つまり穀物、塊茎、果物、香料、薬用植物に言及されている。次に「動物王国」が語られる。鳥類、陸上動物、魚類、甲殻類についてである。また大型のスペイン船が航行しうる大河とその岸辺を覆う樹木について記されている。それらの木々を加工すれば豊富な木材が得られること、船舶や家の建造が可能となることなども記されている⁷⁴⁾。中央セルバが自然資源の宝庫であったことがうかがい知れる。

中央セルバにミッションが形成されていくと、コスタやシエラなどから植民地権力や俗人がこの地域に進出し始めた。まずワヌコのエンコメンデーロがセルバへの進出を企てた。セルバ特産品の獲得が主な狙いであった。例えば、ワヌコの富裕な住人でありチンチャイコーチャ(Chinchaycocha)のエンコメンデーロであったフェルナンド・テーヨ・デ・ソトマヨール(Fernando Tello de Sotomayor)が、1616年からパウカルタンボ川の上流にオブラヘ(obraje、織物工場)を運営していたことが知られている。そこではラシャ、毛布、ベーズが生産されていた。父親のフアン・テーヨ(Juan Tello de Sotomayor)は1583年からチンチャイコーチャのエンコメンデーロであったから、フェルナンドは父親のエンコミエンダを継承したことになる。フェルナンドは「ラス・ラグーナス伯(Conde de las Lagunas)」なる称号を得ており地方の名士であり、アシエンダをも営んでいた。彼のアシエンダは、北はワンカバンバやパララ(Parara)、ルセン(Lucén)から、南はセロ・デ・ラ・サルにまで散在していた。この一帯はアムエシヤの居住区であったから、彼のオブラヘやアシエンダの労働力の大半はアムエシヤが占めた⁷⁵⁾。18世に入ると、ワヌコやタルマなどから多くの白人事業主が中央セルバに進出してアシエンダを営み、蒸留酒(aguardiente)造りのためのサトウキビ、ココ、タバコなどを栽培した⁷⁶⁾。彼らはシエラから原住民共同体員をセルバに連行し、これにセルバ原住民を加えてアシエンダの労働力として使役するのだった。とくにワンカバンバは中央セルバの玄関口にあたり、そこではセラノの家族が大勢暮らしていたことが知られている。セロ・デ・ラ・サルにはサトウキビ畑(cañaverales)やサトウキビ汁を搾るための施設(trapiches)がたくさんあった。またココの葉を収穫するためセハ・デ・セルバに入ったセラノ集団を監視するため、タルマのコレヒドールが現地に軍隊を差し向けたことも知られている。セルバ産品の多くはシエラ中央部の市場、とりわけセロ・デ・パスコの鉱山市場に流れた可能性が高い⁷⁷⁾。

セルバのオブラヘ所有者が巨利を得ていたことは確かであるが、その収益の正確な額を知るとは記録が乏しく難しい。17世紀末にハウハ谷のワラオヨ(Hualahoyo)のオブラヘ所有者であったフランシスコ・デ・ラ・フエンテ大尉(el capitán Francisco de la Fuente)は、アンダマルカ村をアシャニカ地域と結びつけるため道路建設に出資した。これはアシャニカ労働力の確保が狙いだったとみなせよう。またタルマ地方にあったサン・フアン・デ・コルパス(San Juan de

Corpas) のオブラへはよく知られていたが、そこではセルバの原住民改宗者が大勢働いていたこと、賃金として年間に 6000 ペソが支払われたこと、年間に 5 万 6000 ペソの収益を上げたことなどが報告されている⁷⁸⁾。

他方で多くの問題が発生した。1742 年にグラン・パホナールに出現したオブラへでは、徴集された原住民労働者が奴隷の如く酷使されるといった事態が発生していたし、レパルティミエント〔repartimiento de mercancías、コレヒドール（地方行政官）がその管轄区＝地方（provincia）の原住民に物品を強制的に分配し、その代価を強制徴収する方式〕が強要されもした。タルマのコレヒドールがセルバの原住民に 10 万ペソ分以上の商品を強制販売し、その代価として 80 万ペソの支払いを強制していたとの報告がある（スペイン法はレパルティミエント、つまり「コレヒドールによる原住民への物品の強制販売」を禁じていた。その合法化は 1754 年のこと）。また 1742 年にキミリの教会はアシャニンカから十分の一税（diezmo、信者が教会に納めた税）を現物ではなく現金で徴収していた⁷⁹⁾。さらにスペイン人事業主がセルバの改宗原住民をシエラで労働させるため強制連行するといった事態も起きた。セルバ原住民のシエラへの強制連行を禁止する政令が頻発していることから、そうしたケースがかなり一般化していたものと判断される。こうしてみると、1742 年の時点で中央セルバの原住民がスペイン支配の下におかれていたことが明白である。フアン・サントスの説教がアシャニンカやアムエシャに受け入れられた理由としてサントス・グラネロは、レパルティミエントやオブラッへ、ミタといったスペイン支配の圧制をセルバ原住民が直接的に被っていたため、と述べている⁸⁰⁾。

## II スペイン植民地支配下におけるシエラ中央部

17 世紀半ばになって中央セルバへの関心が急浮上した背景にはいったい何があるのだろうか。サントス・グラネロとレイ・デ・カストロは、中央セルバの浮上を、1630 年から操業が開始されることになったセロ・デ・パスコ銀山（las minas de plata de Cerro de Pasco）と関連づけて捉えた⁸¹⁾。この鉱山はシエラ中央部のタルマ地方に位置し、重大な影響を地域経済に与えることになった。セロ・デ・パスコは別名「ヌエボ・ポトシ（Nuevo Potosí）」とも呼ばれ、創業以後この銀山はポトシ銀山に続いて南米で最も重要な銀山の一つになっていく⁸²⁾。それはフランシスコ会宣教師が中央セルバに入る 5 年前のことである。セロ・デ・パスコ銀山の開発はペルー副王領における銀生産に重大な影響を及ぼした⁸³⁾。例えば、カヤオ港からスペインへの銀の発送記録に従えば、1620～1630 年に年間平均 132 万 1620 ペソ（272 万マラベディス）の銀がスペインに送られたが、その規模はセロ・デ・パスコ銀山が操業された直後の時期（1632～1642 年）になると年間平均 228 万 2000 ペソに上昇している。これは 72% の増加を意味する。ペルー副王領における銀の生産量のうちセロ・デ・パスコ鉱山から産出された銀の占める割合がいかに大きいものであったかがわかる。セロ・デ・パスコの銀生産量は 17 世紀から 18 世紀を通じて安定的に維持された。（1776 年以降セロ・デ・パスコ鉱山は、凋落の一途を辿るポトシ銀山に続いて第二の銀生産地となるオルロ銀山と銀の生産高を争った⁸⁴⁾）。17・18 世紀を通じてセロ・デ・パスコ銀山を中核とするシエラ中央部の地域市場は、中央セルバから産出された物資（サトウキビから造られた蒸留酒、ココ、タバコ、織物など）の一大吸収地になったと考えられる。

以下では、シエラ中央部の 8 つの地方における経済の動向と原住民の社会的状況を検討する。



そしてその原住民社会の変容について、タルマ地方の場合をとりあげてフォラステーロ問題を中心に考察する。

## 1. シエラ中央部の経済動向と原住民

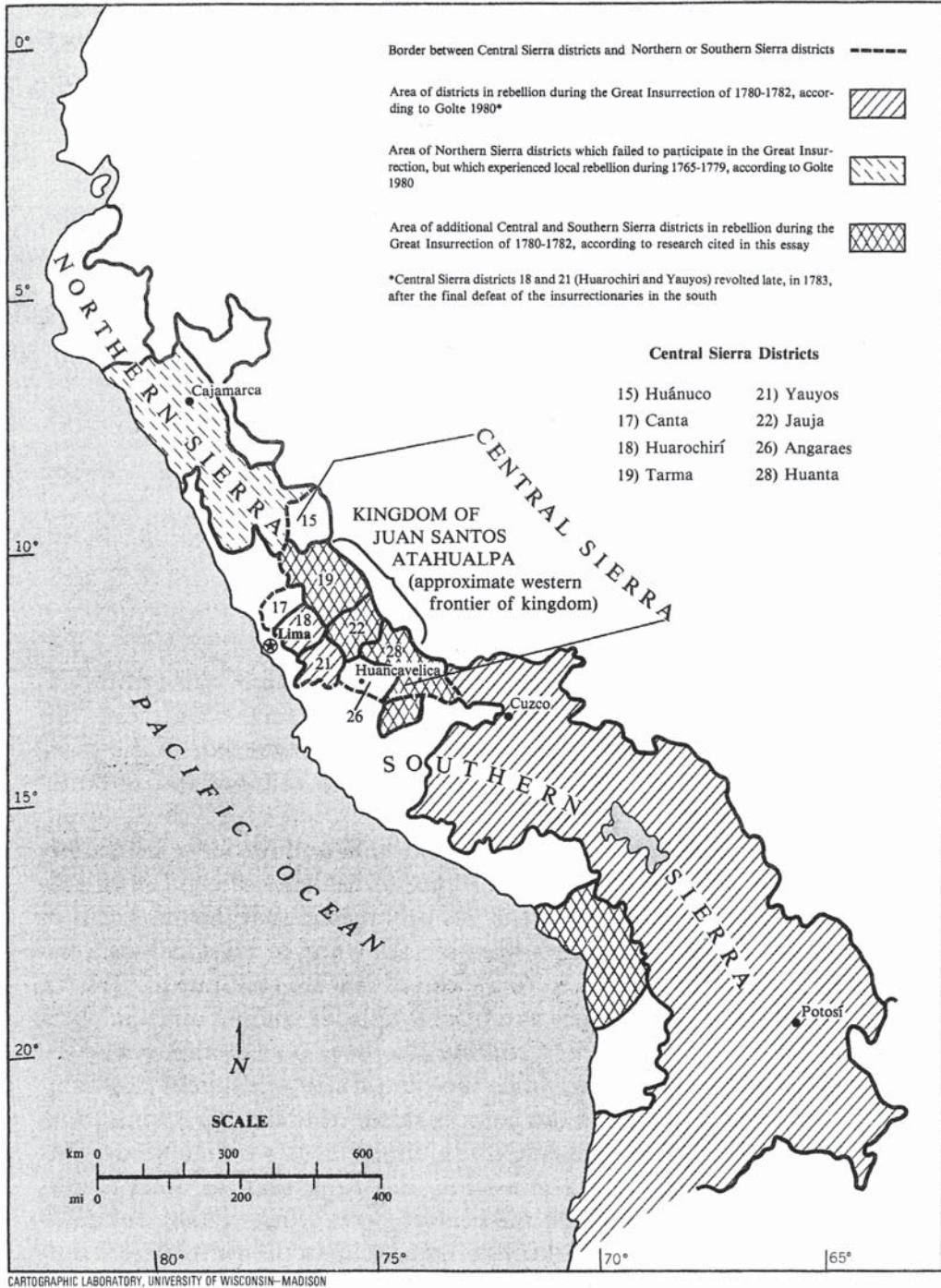
植民地中枢リマ市とセロ・デ・パスコをはじめシエラ中央部とはチリョン（Chillón）とサン・マテオ（San Mateo）の渓谷をたどる道路（途中カンタを經由する）で結ばれていた。この道をたどった場合、リマからセロ・デ・パスコまでは58レグア〔1レグア（legua）は約5.56キロメートルであったから、およそ323キロとなる〕の距離であり、ワヌコまでは81レグア（約450キロ）であった。セロ・デ・パスコまでは徒歩で4日から5日くらいかかった。この道路はシエラ中央部の市場にむけてさまざまな商品の輸送を担うアリエロ（arriero、ラバを使用した馬方）や商人が往来する舞台であった⁸⁵⁾。ペルー植民地経済の基軸ともいえる商業交易路（circuitos comerciales）を支配していたリマ特権商人（リマの商業エリート。海外貿易はもちろんのこと、リマと副王領内各地方とを結ぶ商業を支配した）の指揮下で、ヨーロッパからの輸入品⁸⁶⁾のみならず、植民地域内の物品が大量にセロ・デ・パスコにもたらされた。品目としては輸入織物、水銀（azogue、ワンカベリカ産ならびに輸入水銀⁸⁷⁾）、ブドウ酒の蒸留酒（aguardiente、イカ産。ピスコからカヤオへ海路輸送された後、リマ商人の手でセロ・デ・パスコへ運ばれた）が優位を占めた。食糧品はタルマやハウハ地方を流れるマンタロ川を中心とする渓谷部や、太平洋沿岸部のチャンカイ地方から運ばれた。またシエラ中央部諸地方からも品物が流入した。主な品目としては水銀（ワンカベリカ産）、ココの葉・砂糖・塩を含む食糧品、織物・衣類などである⁸⁸⁾。

18世紀に入ると、各種織物類を中心に舶来品がヨーロッパなどからペルー副王領に大量に流入し、副王領域内産品の流通度も著しく高まった。この貿易や商業を通じて最大の利益を得たのは、リマ市において商人ギルド（Consulado）を形成していた約2000人からなる特権商人層であった。シエラ中央部の経済を支配したのも彼らである。副王庁を擁する首都という場所柄もあって、彼らは植民地政府の重要な官職を独占してもいた。こうして政財界に絶大な勢力を築いた彼らは、地方のコレヒドールや財務官と癒着して暴利をむさぼった⁸⁹⁾。リマに到着した膨大な輸入品の多くは、このリマ商人の采配によって地方に運ばれた。輸入の増加に呼応してペルー副王領からの輸出額も急成長を遂げる。品目的にはポトシやオルロ、セロ・デ・パスコなど各地の鉱山から集めた銀が主体であった。セロ・デ・パスコ鉱山における銀生産量は増加の一途を辿ったが、このことがシエラ中央部地域の経済活性化に拍車をかけた。

以下では、シエラ中央部の8つの地方（地図3参照）における原住民の社会的状況について、

原住民共同体の人口分布を検討したあと、16世紀から続く貢納（tributo）とミタ（mita）、そして18世紀に入って急成長を遂げたレパルティミエントの実態を考察する。そしてこれらの影響を考える。

18世紀半ばの原住民人口の分布について第1表をご覧ください。人口規模を高い方から地方別に見ていくと、ハウハを先頭に、タルマ、ワンタ、ワロチリ、カンタ、ヤウヨス、ワヌコ、アンガラエスの順となっている。全人口に占める原住民人口の割合は、ワロチリ、カンタ、ヤウヨス、アンガラエスにおいてとくに高く、いずれも80%以上である。これに比べて中央セルバに隣接していたワヌコ、タルマ、ハウハ、ワンタの4地方では45%から62%と割合低いことがわかる。このことは裏返して言うならば、これら4地方においては、白人など非原住民人口の集中度が高かったことを意味する。



地図3 18世紀ペルー副王領・シエラ中央部

出所：Steve J. Stern, "The Age of Andean Insurrection, 1742-1782: A Reappraisal." Steve J. Stern (edited by), *Resistance, Rebellion, and Consciousness in the Andean Peasant World 18th to 20th Centuries* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1987), p. 41.

第1表 シエラ中央部8地方における総人口、原住民人口、原住民人口の占める割合（1754年）

地方名	総人口（人）	原住民人口（人）	原住民人口の占める割合（%）
ワヌコ	16826	7598	45
タルマ	34911	18821	54
ハウハ	52286	28477	55
ワнта	27337	16981	62
アンガラエス	3245	2691	83
カンタ	12133	10333	85
ワロチリ	14024	13084	93
ヤウヨス	9574	8005	84
	170336	105990	70

出所：Jürgen Golte, *Repartos y rebeliones Túpac Amaru y las contradicciones de la economía colonial* (Lima: IEP, 1980), p. 44.

続いて貢納についてみてみよう。貢納を課せられた原住民人口〔18歳から50歳までの成年男子。共同体成員ならびにフォラステロ（forastero. 共同体を離脱した浮浪の原住民）〕の規模は第2表のごとくである。貢納納入者人口の規模を地方別に高い方から見ていくと、ハウハ、アンガラエス、タルマ、ワнта地方の順となっている。共同体成員人口の規模はハウハ、アンガラエス、ワロチリ、タルマ地方の順に高くなっている。次にフォラステロ人口の規模についてであるが、それはワнта、ハウハ、ワヌコ、タルマ地方の順に高くなっている。貢納納入者人口に占めるフォラステロ人口の割合はワнтаが群を抜いて高く、ワヌコ、タルマ、ハウハと続く。こうしてみると、中央セルバに隣接するワнта、ハウハ、ワヌコ、タルマの4地方にフォラステロが集中していたことがわかる。

第2表 シエラ中央部8地方における原住民貢納納入者人口（1754年）

地方名	実際の貢納 納入者人口 （人）	貢納納入を義務 づけられた人口 （人）	共同体員 （人）	フォラステロ （人）	フォラステロ の占める割合 （%）
ワヌコ	4427	960	636	324	34
タルマ	8454	1785	1479	306	18
ハウハ	21062	4219	374	472	11
ワнта	6935	1688	811	877	52
アンガラエス	9953	1876	1822	54	3
カンタ	8162	1444	1303	141	10
ワロチリ	7711	1534	1492	42	3
ヤウヨス	6835	1337	1337	—	0
	73539	14843	9254	2216	16

出所：Jürgen Golte, *op.cit.*, p. 54.

タルマ地方の場合、貢納は16世紀から現物支払い（pago en especies）であったが、少なくとも17世紀になると現金での支払い（pago en dinero）が義務づけられていた。これはセロ・デ・パスコ銀山から産出された銀と深く結びついていたことが想起される。1722年において同地方の原住民共同体員は1人当たり年間に8ペソ4レアル支払っていたから、その負担額は大きかったと言っている〔この査定は1688年の副王バラタ侯（Melchor de Navarra y Rocafull, Duque de la Palata. 在位1681～1689）によるものである〕⁹⁰⁾。

次にミタについて見ていく。ワンカベリカ水銀鉱山（アンガラエス地方）のミタがその労働者に対していかに過酷な運命を強いたかは別稿において既に論じた。ワンカベリカ鉱山は「死の鉱山」として人々から恐れられた⁹¹⁾。ワンカベリカ鉱山のミタの規模については第3表の通りである。8つの地方のうち、5つの地方—ワンタ、ハウハ、ヤウヨス、アンガラエス、タルマ—がワンカベリカ水銀鉱山にミタ労働者を送っていた（ワヌコ、カンタ、ワロチリはミタ労働者を送っていなかった）。この5つの地方からのミタ徴集総数は1031人であり、これはワンカベリカ水銀鉱山のミタ労働者全体の約52%を占める。次にミタの規模を地方別に高い方から見た場合、地元のアンガラエスを筆頭に、ワンタ、ハウハ、ヤウヨス、タルマの順となる。

第3表 ワンカベリカ水銀鉱山のミタの規模（1772年）（単位：人）

地方	ミタ徴集人数 (成年男子人口の1/7)	鉱山に常駐の ミタ労働者数(人)
◎ワンタ	251	62
パリナコチャ	46	11
ビルカシュワマン	108	26
◎ハウハ	181	44
カストロビレイナ	170	42
アイマラエス	289	71
アンダワイラス	28	6
◎ヤウヨス	144	36
チュンビビルカス	140	34
コタバンバス	175	43
◎アンガラエス	351	87
◎タルマ	104	25
ルカナス	112	28
合計	1983	521

(◎がシエラ中央部の地方。この5つの地方からのミタ徴集人数の合計は1031人)

出所：Jürgen Golte, *op.cit.*, p. 76.

最後にレバルティミエントであるが、シエラ中央部8地方におけるレバルティミエントの法定規模（1754年）⁹²⁾は第4表のごとくであった。割当て額を地方別に高い方からみると、タルマを先頭に、ハウハ、ワロチリ、カンタ、ヤウヨス、ワンタ、ワヌコ、アンガラエスの順となる（カ

ンタとヤウヨスは同額)。レパルティミエント対象人口との比例関係は見られない。1人当りの負担額は地方によってばらばらで落差が見られる。1人当りの負担額を高い地方順にあげていくと、タルマ、ヤウヨス、ワロチリ、カンタ、ワクタ、ワヌコ、ハウハ、アンガラエスとなる。タルマ地方におけるレパルティミエントの割当て品の内容は、フランネルや綿布、サテンの布地、鉄製器具、毛織物、絹織物、キト織、ベーズ、毛布、梳毛、羊毛、革、ナイフ、マチェテや斧、平くぎ、針、ラバ、紙、蠟などであった。それらはブルターニュ地方やイタリア、カスティージャ（スペイン）、中国などの海外から、またクエンカやキト、ピウラヤチリなどペルー副王領域内から流入した（ラバはトゥクマンとサルタの両地方から運ばれた）⁹³⁾。とはいえ、以上はあくまでも「法定」レベルであって、実際の割当て規模やその内容は、コレヒドールの「不正」が加算されたために、「法定」をはるかに上回ったのである⁹⁴⁾。

第4表 シエラ中央部各地方におけるレパルティミエントの法定規模  
(1754年) (5か年当り、割当て額の単位：ペソ)

地方名	人口(人)	割当て額 (ペソ)	1人当りの割当て額 (ペソ)
ワヌコ	4427	50000	11.29
タルマ	8454	200000	23.66
ハウハ	21062	150000	7.01
ワクタ	6935	119200	13.60
アンガラエス	9953	36420	3.66
カンタ	8162	125000	15.31
ワロチリ	7711	140000	18.16
ヤウヨス	6835	125000	18.29
	73539	945620	13.87

出所：Jürgen Golte, *op.cit.*, p. 104.

これまでの分析から何が読み取れるか。まずもって、18世紀後期に発生したトゥパック・アマルの反乱の拠点となったクスコ司教区ティンタ地方に課せられていたレパルティミエントの規模が「11万2500ペソ」であったことを想起しよう。この数値を、シエラ中央部諸地方のそれと比較するならば、タルマ地方を筆頭にシエラ中央部の6つの地方（タルマ、ハウハ、ワロチリ、カンタ、ヤウヨス、ワクタ）までがティンタ地方のそれを上回っていたことが判明する。また5つの地方（ワクタ、ハウハ、ヤウヨス、アンガラエス、タルマ）に課せられていたワンカベリカ水銀鉱山のミタの負担は実に大きいものであったと言える。この2つの点だけからも、シエラ中央部の原住民に課せられた負担がきわめて大きなものであったと断言できる。最後に、中央セルバに隣接していたワヌコ、タルマ、ハウハ、ワクタの4地方において非原住民人口の集中度が高かったこと、フォラスターロの占める割合が大きかったことを再度確認しておきたい。

## 2. 原住民社会の変容：フォラスターロ問題を中心に

以下ではシエラ中央部のうちからタルマ地方の場合をとりあげて、標記の点を考察しよう。

古来よりタルマ地方はシエラ側から見て、開発が行われていた地域の面積は比較的小さかった。4つの生態学的階床 (pisos ecológicos) に人々の手が及んでいた⁹⁵⁾。こうした中で、セルバとの関係で言えば、ウィトク (Witok) がセハ・デ・セルバにおける唯一の飛び地 (enclave) であった。この飛び地はインカ時代に築かれ、植民地時代においてもコカの産地としてシエラの原住民により維持され続けた (17世紀以降、この飛び地における農産物の生産量は増加したといわれる)⁹⁶⁾。

各生態学的階床における典型的な生産物についてみておく。まずプーナ (puna. 標高 4000 ~ 4800m) とスニ (suni. 標高 3500 ~ 4000m) 地帯ではアルパカや羊など家畜の毛とジャガイモなどの塊茎が豊富に獲れたほか、小麦、大麦なども栽培されていた。ケチュア (quechua. 標高 2300 ~ 3500m) 地帯⁹⁷⁾の渓谷部ではもっぱらトウモロコシや豆類が獲れた。18世紀になると家畜生産のためにアルファルファの牧草地が増え、スペイン人やクリオーリョによって多くの土地が所有されていた。他方、原住民共同体からの農産物等の産出量は激減していた。その第一原因として土地の譲渡 (enajenamiento de tierras), つまりアシエンダの増加が進行していたことがあげられる。第二に、原住民共同体員人口の不足 (falta de indios originarios) という事情があった (時代は少し後になるが、1786年では多くの原住民家族の維持が困難に陥っており、互恵関係はもはや機能不全に陥っていたとの報告がある)。次に土地の規模をみておく。ケチュア地帯の農地が割合小規模であったのに比べ、プーナとスニ地帯に設けられたアシエンダの面積は広く、1つのブロックに2つの生態学的階床を含むことも珍しくはなかった。アシエンダからの代表的な産物は家畜であった [牧畜アシエンダ=エスタンシア (estancia)] (アンデスにおいて家畜は富の象徴であった)⁹⁸⁾。

フォラステーロは「共同体を離脱し他の地域に逃亡した原住民」を指すが、逃亡の動機はいろいろであった。高額な貢納や各種のミタ、人的奉仕、アシエンダやオブラへなどでの虐待、レパルティエメントの回避などがあげられる。タルマ地方の場合、このほかに伝染病の流行がもたらした影響も見逃せない。とくに1718~20年の伝染病は広範囲に及んだ。さまざまな病気を含んでおり、とくにペスト、天然痘、インフルエンザの被害が甚大であった。その影響でかなりな数の原住民が死亡した。1722年にタルマのカシケは貢納の再査定を申請したが、その際、「ペストのせいで大勢の原住民が遠方に逃亡してしまい、いなくなった」と強調した。新たな貢納台帳の作成を目前に控え、「原住民の消失」という条件を考慮するよう当局に要望した。タルマ地方から大勢の原住民がリマ市やワヌコ市を目指して流出するケースが17世紀以降頻繁に見られた。流出者の多くは若年層であったといわれている。リマではもっぱら大工、仕立屋、靴職人、会計係、帽子製造業者として、またワヌコでは手工業者、給与所得者、大工として働いたという。18世紀になるとセロ・デ・パスコ銀山などの鉱業中枢や製造部門、アシエンダに移住する原住民が目立った。他に季節労働者として働く者もかなりいたといわれている⁹⁹⁾。

タルマ地方におけるフォラステーロの実態に関しては、地方の統治規準、原住民社会の状況などにより多様であった。フォラステーロはある種の特権を享受していた。というのも彼らは土地なし原住民と見なされ、課せられた貢納額は共同体員のそれよりも低かったほか、ミタを免除されたからである。一般的に言って共同体のカシケはフォラステーロを擁護した。その理由はフォラステーロが共同体に利益をもたらしたからである。フォラステーロの到来をカシケは歓迎した。例えば、チンチャイコーチャのカシケがフォラステーロを匿っていたとの証言がある。18世紀になるとカシケの権力喪失が目立つようになったが、その一方でフォラステーロは激増した (逆に

言う)と共同体員数の減少である)。フォラステーロはワヌコなど隣接した地方からもっぱら到来したが、遠くはチャチャボヤス地方から来ている者もいた¹⁰⁰⁾。

フォラステーロが共同体員に統合されるケースも見られた。その方法としては、擬制的親族関係構築の代表格であったコンパドラスゴ (compadrazgo, 実父-代父関係) が作用する場合も少なくなかった。原住民共同体によそ者が加入するなどということは、(特別な場合を除くと) 植民地時代初期にはほとんど考えられなかった。しかしこの時期になると共同体にとってフォラステーロは有益な存在となっていた。共同体にいるフォラステーロの数が当局 (コレヒドール) にきちんと報告されることは少なかった。タルマ地方では共同体に統合されたフォラステーロが土地を取得するに至ったケースも多い。しかしその一方で、共同体を助けるはずのフォラステーロとの関係がこじれ、共同体員がフォラステーロをアウディエンシア (Audiencia, 聴訴院) に訴えるといった事態すら起きた。18世紀になるとアシエンダで働く原住民労働者(その大半がフォラステーロ)の数が増えていった。歴代の副王は「フォラステーロ問題」を認識しており、彼らに共同体員と同じ規模の貢納を課そうとしたり、ミタへの動員を試みもしたが、すべて失敗に終わっていた¹⁰¹⁾。

18世紀に入るところになるとシエラ中央部の原住民社会は大きく変容を遂げていた。シエラ中央部においてフォラステーロの人口規模が増幅した(逆に言うと共同体員の数が減少した)こと、アシエンダの原住民労働力が増えた点に注目してみるだけでも、原住民社会の変貌ぶりは明白となる。そしてこのことは、スペイン法に則って言うと、スペイン国王の臣下であるはずの原住民の相当な部分が、国王の支配下から脱しつつあったことを意味していた。

セロ・デ・パスコ銀山における銀生産の増加に伴う経済の活性化は、シエラ中央部諸地方の原住民に対する搾取・収奪に拍車をかけた。そして、中央セルバに隣接していたワヌコ、タルマ、ハウハ、ワンタ4地方の人口動態に大きな影響を及ぼす。この4地方から中央セルバに向けて原住民人口の流出が起きた。こうした東方志向の高まりは時代の進行と共に加速されていった。ワンカバンバやチョンタブンバ (= オクサバンバ) (Chontabamba, Oxapampa)、パウカルタンボの谷にまでたどり着いていたシエラの原住民 (セラノ) は、さらに奥地に向けて出発したのであった¹⁰²⁾。

先スペイン期からセラノと中央セルバ原住民との間では密かに接触が行われてきたことが知られるが、それは中央セルバが、コカの葉、果物、木材、塩、綿などの特産品を生み出したからである。タルマ地方のセルバに道路が開通した17世紀半ば以降、中央セルバにはアシエンダが進出していき、そこではもっぱらサトウキビが育ち、砂糖や蒸留酒が生産された。18世紀になるとサトウキビに加えてコカ、木材、バルサム剤の生産も顕著となる¹⁰³⁾。

過酷な生存環境から逃亡しようとする人々にとって中央セルバはまたとない避難場所となった。アンデスの原住民はあらゆる場所から中央セルバに逃亡して来た。プーナの鉱山や溪谷部のオブラヘから、またセハ・デ・セルバのサトウキビやコカのアシエンダなどからも人々は続々とセルバにやって来た。セルバに多くのセラノが移住しそこで暮らしていたことは先章でもふれたが、その規模について、18世紀当時に書かれた資料は、シエラからの移住者とその子孫たちが数千人にまでふくれあがっていた点を繰り返し語っている¹⁰⁴⁾。

### III 中央セルバにおける伝染病の流行と反乱の発生

中央セルバにおける白人（スペイン人やクリオーリョ）の到着と原住民集住政策は、アラワク系原住民社会に深刻な影響を与えた。第一に、これまでも指摘してきたように伝染病がたびたび蔓延したことだ。とくに天然痘（viruela）、麻疹（はしか）（sarampión）、インフルエンザ（＝流行性感冒）（gripe）、風邪（catarro）、ペスト（peste）などの流行があげられる。これらに感染した原住民は大量に死亡したのであった。17世紀ではとくに1673年と1691年における伝染病の蔓延が知られる。これに対してアシャニンカは武力による抵抗によって応えた。1674年にはピチャナのアシャニンカ指導者マンガレ（caudillo Mangoré）とその部下たちが、フランシスコ・イスキエルド神父（padre Francisco Izquierdo）をはじめ4人の宣教師を殺害した。1694年には、数人のスペイン人兵士の侵害が引き金となってペレネ川上流域で原住民が反乱を起こし、その結果、3人の宣教師が殺害された。18世紀に入ると、1712年にはエネノにおいて、また1719年にはカコ（Caco）においてアムエシャの反乱が起きた。1721年には、1714～1718年にペルー副王領で大流行したペストが中央セルバの改宗区に及び、1723年までの2年間猛威を振るった。そして1724年にアシャニンカのリーダー、フェルナンド・トロロテ（Fernando Torote）の率いる反乱が起きた。また1736年から1737年にかけてアムエシャとアシャニンカのミッションでは風邪とインフルエンザの流行によって大量の死者が出た。これに対して原住民は再び武力抵抗で応えた。1737年カタリパンゴにおいて指揮者イグナシオ・トロロテ（Ignacio Torote）の率いる反乱が発生し、宣教師をはじめカトリックに改宗した原住民が殺害された¹⁰⁵⁾。このように、伝染病（やスペイン人兵士の脅威）が発生するたびに原住民が犠牲になったこと、そして武力による抵抗運動が起きていたことがわかる。

しかしこうした犠牲にもかかわらず、フランシスコ会士たちは布教を続けるのだった。そして1742年までには、アシャニンカの居住領域のほぼ全体にミッションが設立されていたといわれる。そしてこれと平行して、シエラから到来したスペイン人入植者（コロノ）はアシャニンカの居住地域にアシエンダ（大農園）やエスタンシア（牧畜アシエンダ）を設立していったのである¹⁰⁶⁾。

ファン・サントスの反乱に至るまでの中央セルバにおける伝染病の流行の一部を整理しておくと、その発生件数は、1602年から1736までに16件におよぶことが報告されている。その内訳は、8件が天然痘、2件がインフルエンザ、1件が麻疹であり、残りの5件は特定できないという。

18世紀以降の伝染病と反乱の関係をさらに詳しくみていこう。18世紀にセロ・デ・ラ・サル付近に設けられたアムエシャ・ミッションの改宗者人口の動態を、第5表に基づいて検討すると、伝染病の流行とその結果発生した反乱の影響がはっきりと見て取れる。一見するとばらばらのように見えるが、両者の間には因果関係があった。3年に1度の割合で人口変動の周期が見られる。1712年においては後に5つとなるアムエシャ・ミッションのうちの3つ〔キミリ、クリスト・クルシフィカード（Cristo Crucificado）、エネノ〕のミッションが設立されていた。しかし記録では2つのミッションの人口データしかない。キミリの情報が欠落している。各ミッションの人口は平均して約600人である。しかし3年後の1715年をみると人口が変動している。とくにエネノ・ミッションにおける人口減少が目立つ。1715年にフランシスコ会士フランシスコ・デ・サン・ホセは、585人の原住民男女に加えて、洗礼を施された112人の幼児の大半が天然痘で死亡したと述べている。このことは、アムエシャ領域において布教活動が始まったとたんに、天然痘が発生・



流行したことを示している。エネノ・ミッションでは天然痘の発生直後に原住民反乱が起き、宣教師が全員追放された¹⁰⁷⁾。アムエシャはヨーロッパ人によって自領域に持ち込まれた病気が致命的な結果をもたらすことを察知した。そしてこの病気がもたらした死亡率の高さが、1712年のエネノの反乱の原因となったのである¹⁰⁸⁾。

第5表 1712年から1742年にかけてのセロ・デ・ラ・サルのフランシスコ会改宗区  
5つのアムエシャ・ミッションの人口推移 (単位: 人)

ミッション名 / 年代 (年)	1712	1715	1718	1721	1724	1727	1730	1733	1736	1739	1742
キミリ	—	—	101	120	100	—	91	134	210	109	304
ニハンダリス	—	32	69	66	13	—	21	23	27	30	55
クリスト・クルシフィカード	588	386	407	237	92	—	58	106	119	103	211
メトラロ	—	120	300	312	—	—	—	96	73	20	38
エネノ	600	—	445	402	297	—	245	87	213	125	232
合計	1188	438	1322	1137	502	—	415	446	633	387	840

出所: Fernando Santos Granero, “Epidemias y sublevaciones en el desarrollo demográfico de las misiones Amuesha del Cerro de la Sal, siglo XVIII.” *en Histórica*, Vol. XI, No. 1, Julio de 1987, p. 33.

エネノ・ミッションは3年毎に放棄されたといわれている。そしてそのたびに人口が減った。1715年にはさらに2つのミッション、ニハンダリスとメトラロが建立されているが、この年エネノ・ミッションからクリスト・クルシフィカードのミッションに宣教師が撤退した。1718年になると宣教師たちはエネノ・ミッションを再建するためそこに戻り、再建を行った。このようにして、3年毎に浮き沈みを繰り返して改宗区が確立されていった。第5表の5つのミッションの人口変動をみると、人口が激減してはまた回復するというサイクルが見られる（伝染病は定期的に改宗者を襲い続けた）¹⁰⁹⁾。

1718年から1720年にかけての3年間には各ミッションの人口はあまり変動していない。この期間においては伝染病の流行がみられなかった。しかし、エネノ・ミッションからペレネ川を少し下ったところにあるサン・フランシスコ・デ・ピチャナ (San Francisco de Pichana。以下、「ピチャナ」と略称する) のミッションにおいて、そこに居合わせたフアン・デルガド修道士がアシャニンカによって殺害された。この事件は、ピチャナの原住民改宗者に衝撃を与えたにちがいない。ピチャナからペレネ川を少し下ったところにあるサン・タデオのアシャニンカ・ミッションでは黒人奴隷が警護員兼人夫頭として仕えており、原住民の目にはこの黒人たちが征服者の象徴として写ったことだろう。しかし後に、この黒人たちはフアン・サントスの反乱軍に加わり、スペイン人に対して勇猛に戦っている。1719年にもメトラロ近郊において修道士が原住民によって殺害されている¹¹⁰⁾。

1721年から1724年にかけてアムエシャ・ミッションではペスト、天然痘、麻疹、インフルエンザが流行し、死者の数が最高となった。中でもメトラロのミッションが大きな被害を受けた。メトラロにおいて人口が回復するのは、1730年から1733年にかけてミッションが再建されてからのことである¹¹¹⁾。(1723年にはサン・タデオのミッションにおいて宣教師が、3000人のアシャ

ニンカの前で「フェルナンド・トロージェ」の名前で一人のカシケに洗礼を施した。しかしその後からトロージェは反乱者となる（先述¹¹²⁾。）

1724年から1730年にかけてのうちに、とくに1727年には5つのミッションのすべてにおいて人口が皆無となった。伝染病はこの5つのミッションのほかにも中央セルバの大半のフランシスコ会ミッションに甚大な被害をもたらした。そしてスペイン人の出現に対して抵抗運動が盛り上がった。1723年エネ川とペレネ川の合流点にヘスス・マリアのミッションが設立されたが、翌1724年、このヘスス・マリアのミッションにピロの指導者が現れ、「子供と仲間が洗礼を受けられないままペストで死んだ。このままだと全員が地獄におちることになる。天国に行くにはどうすればよいか」と聖職者に迫ったという。同年5月フランシスコ会士たちが14人の白人と20人の改宗原住民を伴い到着。翌日、彼らは待ち伏せにあい全員が殺害された。この反抗を指揮したのがフェルナンド・トロージェであった。この反乱後、アムエシャ・ミッションは1730年に至るまで長い衰退期に陥った。そしてやがてグラン・パホナルのアシャニンカへの布教が開始される（1729年にはカタリパンゴのミッションが設立されており、これが足がかりとなる¹¹³⁾）。

1730～33年になるとアムエシャ・ミッションではようやく人口が回復する。1733～36年にはグラン・パホナルのアシャニンカがメトラロのミッションに移動したことによって全体的にアムエシャ・ミッションの人口が増えたためである。しかし1736年には結核（tuberculosis）が蔓延し再び武力による抵抗運動が起きた。フェルナンド・トロージェに率いられたアシャニンカの反抗である。この結核の流行後、1737年にかけてカタリパンゴやソノモロのミッションにおいてイグナシオ・トロージェ（Ignacio Torote. カタリパンゴのアシャニンカ・カシケ。フェルナンド・トロージェの息子）が「カトリックの説教からの自由と解放を求めて」蜂起した。まず3人の宣教師が殺害され、続いて15人の聖職者が犠牲になった。（同時期にハウハ改宗区のアシャニンカの間でも反乱が起きている。）アムエシャ・ミッションでは、エネノとメトラロ両ミッションの指導者兼カシケであったマテオ・デ・アシスがスペイン人側に立って、イグナシオ・トロージェ率いるアシャニンカと戦った。しかし、その5年後に起きたファン・サントスの反乱のさいにマテオ・デ・アシスは、反乱軍側に与して戦ったのであった。忠誠をめぐるこの変貌理由に関して、アントニーネ・ティベサル（Antonine Tibesar）会士は、マテオ・デ・アシスが彼の子供の大半（3人の娘のすべてと、3人の息子のうちの2人）を1736年の伝染病で亡くしたことに原因があると述べている¹¹⁴⁾。

アロンソ・サルサルは、1730年から1742年にかけて伝染病による死者数を年間平均で少なくとも1250人と考察している¹¹⁵⁾。セルバ原住民の間では伝染病がもたらす被害が反乱の主要な原因であった。中央セルバにおけるアラワク系原住民による主な反乱・蜂起の記録は第6表のとおりである¹¹⁶⁾。反乱が連続的に起きていることがわかる。ところで、1724年と1737年にそれぞれトロージェ父子が指揮した反乱には重要な特徴があった。この2つの反乱においては、いずれもアムエシャ、アシャニンカ、ピロの連合体によって反乱軍が結成されていた点である。この連合体にはやがてクニボ（コニボ）も合流する¹¹⁷⁾。言い換えると、中央セルバ地域内ではあったが複数民族の団結（un conjunto multiétnico）がなされていたことである。

第6表 中央セルバにおけるアラワク系原住民による主な反乱の記録

年代 (年)	反乱指導者
1637	サンパティ (キミリのアシャニンカ)
1654	サントウマ (アシャニンカ)
1654	マンガレ (ピチャナのアシャニンカ)
1724	フェルナンド・トローテ (アシャニンカ / サン・タデオのミッション)
1736 ~ 1737	イグナシオ・トローテ (アシャニンカ / ソノモローパンゴア)
1742 ~ 1755	フアン・サントス・アタワルパ
1742	シアバル (コニボ / キソパンゴのカシケ)
1742	ペロテ (コニボ / 反乱を組織)
1776	ルミラト (セテボス, シビボ, コニボの反乱)

出所：Pablo Macera (Estudio Histórico) / Enrique Casanto (Tradiciones Ashánincas), *El poder libre Asháninca Juan Santos Atahualpa y su hijo Josecito* (Lima: Universidad de San Martín de Porres, Fondo Editorial, 2009), p. 10./Alberto Flores Galindo, “La chispa y el incendio: Juan Santos Atahualpa.” en Alberto Flores Galindo, *OBRAS COMPLETAS III (I)* (Lima: Sur Casa de Estudios del Socialismo, 2005), pp. 105–106.

原住民たちは伝染病の流行を修道士のせいにした。そしてその反動は激しいものとなった。シリピアリ (shiripiaris. アシャニンカのシャーマン) やコルネシャ (アムエシャの伝統的な政治・宗教上のリーダー) は、伝染病が蔓延するたびに、フランシスコ会士に対して反乱・蜂起を予告した¹¹⁸⁾。アラワク系原住民の各民族間には昔から交流がみられたが、とりわけ1720年代以降になると、民族や地域の垣根を越えた原住民の連合体によって反乱軍が結成されるようになった。こうした状況下で1742年、「アブ・インカ」を名乗るセラノのフアン・サントス・アタワルパがアシャニンカの領域に姿を現した。そしてセロ・デ・ラ・サル近郊メトラロ (アムエシャ領域) に移動して、そこに反乱拠点を築き、スペイン人のくびきから住民を解放するために人々を召集したのである¹¹⁹⁾。最後になったが、この反乱軍に身を投じたのは中央セルバのアラワク系原住民だけだったのではない。高地出身の原住民系の一部もまたこれに合流したのであった¹²⁰⁾。

#### IV 結び

セロ・デ・ラ・サルには古くからアムエシャの他にアシャニンカ、コニボ、ピロなど中央セルバのアラワク系原住民が集い、塩を採掘し、塩の取引に従事していた。セロ・デ・ラ・サルを中心に地域ネットワークが構成されていた。

16世紀の征服以降ペルーの海岸部から山岳部にかけてスペイン植民地支配体制が確立されると、そこにいた住民は激しい搾取、収奪に曝された。しかし中央セルバにはスペイン支配がすぐには及ばなかった。17世紀になって、中央セルバに対する関心が高まり教権が進出し始める。フランシスコ会ミッションの触手が伸びていく。1635年にフランシスコ会宣教師ヘロニモ・ヒメネスがセロ・デ・ラ・サル近郊キミリに到着し、最初のカトリック・ミッションを立ち上げた。しかしながら現地では宣教師殺害事件が相次ぎ、改宗作業はなかなか思うようにいかず軌道に乗

らなかった。

しかし18世紀に入ってオコパ修道院が設立され布教・伝道態勢が整えられると、オコパ修道院を拠点に中央セルバにはフランシスコ会ミッションが本格的に築かれていった。例えば、ポスト川流域には1726年から1735年にかけてポスト、ティリング、クチェロの各ミッションが設立され、エネ川南方にはカタリパンゴ、ヘスス・マリアが、ベレネ川流域にはサン・タデオが、キミリとセロ・デ・ラ・サルの間にはニハンダリスが、そしてその東方にはメトラロやエネノなどの各ミッションが設けられた。1730年代に入ると、グラン・パホナールにフランシスコ会が進出する。1733年、タンピアニキに最初のミッションが設立され、続いてアポロキアキ、ハビロシ、パウティ、キソパンゴ、シマキなどのミッションが建立されていった。遠くて近寄り難い場所というグラン・パホナールの神秘性が取り除かれ、そこは布教の可能性を秘めた場所に変わった。

これに伴い俗権、すなわち植民地政府権力ならびに白人の事業家や商人などの勢力も及んでいく。ミッション村では貢納の徴収やミタの徴集も行われるようになったほか、レパルティミエントさえも浸透し始めた。またミッション村を中心に、白人事業主が進出しアシエンダやオブラヘが設立されていく。とくにアシエンダでは、蒸留酒造りのためのサトウキビ、ココア、タバコなどが大量に栽培された。シエラから原住民が大勢セルバに連行され、これにセルバ原住民が加えられて労働力が確保された。1742年にグラン・パホナールに出現したオブラヘでは、徴集された原住民労働者が奴隷のように酷使された。またレパルティミエントが強要されもした。1742年にキミリ教会はアシャニカから十分の一税を現物ではなく現金で徴収。さらに、スペイン人事業主がセルバの改宗原住民を労働させる目的でシエラへ強制連行するといった事態も起きた。1742年の時点では中央セルバのアラワク系原住民がスペイン支配の下におかれ、搾取、収奪に曝されていたことが明白である。また伝染病がしばしば蔓延し、数万人に上るともみられる規模のセルバ原住民がこれにかかって死亡したのであった。こうした状況に対して中央セルバの原住民はただ黙って手をこまねいていたのではなかった。結束して立ち上がり始めた。到着していた聖俗の白人に対して、武力によって一斉に異議の申し立てを行ったのである。

フランシスコ会士たちは、主に鉄製品などの贈り物を利用してミッションへの原住民集住をはかった。しかしその後、冶金の技術が修道士らによってセルバ原住民に伝えられると、鉄製道具の生産が原住民の間に急速に広がった。とりわけアムエシャの間では祭事センターに鉄の鑄造・鍛冶場が設けられ、冶金の技術がアムエシャの伝統的な政治・宗教上のリーダーによって発展させられた。祭事場と鍛冶場の最大の結合地点はセロ・デ・ラ・サルのメトラロ（1742年から少なくとも1756年までにかけてファン・サントスが反乱拠点とし防塞を築いた村）であった。そこでは原住民によって鉄製器具の生産が行われるようになった。塩はセルバ原住民を魅了する重要な品であったが、これに鉄製器具という新要素が加わることによって、セロ・デ・ラ・サルの経済・商業上の価値は以前にも増して高まった。と同時に、このアムエシャ領域は中央セルバ原住民の紐帯をいっそう密接なものにしたのであった。

ところで、17世紀半ばになって中央セルバへの関心が急浮上した背景には、1630年から操業が開始されるセロ・デ・パスコ銀山の存在が考慮されるべきである。セロ・デ・パスコの銀生産量は17世紀から18世紀を通じて安定的に維持された。そして17・18世紀を通じてセロ・デ・パスコ銀山を中核とするシエラ中央部の地域市場は、中央セルバから産出された物資の一大吸収地になったと考えられる。

中央セルバに隣接していたワヌコ、タルマ、ハウハ、ワンタの4つの地方では、白人など非原住民人口の集中度が高かったこと、原住民の人口構成の点ではフォラステロの分布度が大きかったことがわかる。シエラ中央部における貢納、ワンカベリカ水銀鉱山のミタ、レパルティミエントの負担の規模をみても、それらが他の地域以上に大きなものであったことが判明する。シエラ中央部諸地方の原住民に対する搾取、収奪の高まりは、とくに中央セルバに隣接していた4地方の人口動態に大きな影響を及ぼす。この4地方から中央セルバに向けて原住民人口の流出が起きた。こうした東方志向の高まりは時代の進行と共に加速されていった。過酷な生存環境から逃亡しようと望む人々にとって中央セルバはまたとない避難場所となった。アンデスの原住民はあらゆる場所から中央セルバに逃亡して来た。プーナの鉱山や溪谷部のオブラヘから、またセハ・デ・セルバのサトウキビやココアのアシエンダなどからもセラノは続々とセルバに到来した。

中央セルバにおける白人の到着と原住民集住政策は、アラワク系原住民社会に深刻な影響を与えずにはおかなかった。とくに伝染病の蔓延がたびたび起こったことである。天然痘、麻疹（はしか）、インフルエンザ、風邪、ペストなどの流行である。これらの病気に感染した原住民は大量に死亡したのであったが、伝染病の蔓延と平行して原住民による宣教師殺害事件が起こった。このことは大反乱発生の予兆であった。1724年のアシャニカのリーダー、フェルナンド・トロロテの率いる反乱、1737年カタリパンゴにおける指揮者イグナシオ・トロロテの率いる反乱へと繋がっていく。

中央セルバにおけるアラワク系原住民による反乱・蜂起の記録を検討すると、反乱が連続的に起きていることがわかる。そして1724年と1737年にそれぞれトロロテ父子が指揮した反乱には重要な特徴がうかがわれる。この2つの反乱においては、いずれもアムエシャ、アシャニカ、ピロの連合体によって反乱軍が結成されていたからである。この連合体にはやがてクニボ（コニボ）も合流する。言い換えると、中央セルバ地域内ではあったけれども複数民族の団結がなされていたことである。すなわち、1720年代以降になると、民族や地域の垣根を越えたアラワク系原住民の連合体によって反乱軍が結成されるようになったことが重要である。

そして、セルバとの境界付近とかセルバに移動・移住していたアンデス高地原住民が、これらのアラワク系原住民に合流する可能性は十分にあった。こうした背景の下で、「インカ」としてのフアン・サントス・アタワルパがグラン・パホナールに到着した。そしてやがてセロ・デ・ラ・サルスの近郊メトラロに移動して、そこに反乱拠点を築き、スペイン人のくびきから原住民系を解放するために人々を召集したのであった。

付記：筆者は本稿の大半を、ペルー・アンカシュ県ワラス市にあるカトリック教会の閑静な付属住居において執筆した。その屋上に上がると、ランラパルカをはじめワスカランやワンドイなどコルディエラ・ブランカ山群の氷雪の峰々が一望できる。この住居をお世話してくださったワラス在住の谷川省三氏、住居のオーナーであるワラス司教区司祭グレゴリオ・エミリアーノ・メサリナ・パレデス神父（Reverendo Padre Gregorio Emiliano Mezarina Paredes）に心より感謝の意を表明するものである。

## 注

- 1) 「グラン・パホナール」とは、現フニン県サティボ郡北部から現ウカヤリ県 (Departamento de Ucayali) アタラヤ郡 (Provincia de Atalaya) 西南部におよぶ地域をさす。ウカヤリ川、タンボ川、ベレネ川、ピチス川に囲まれた熱帯セルバ。南緯 10 度 30 分から 10 度 00 分、西経 74 度 40 分から 73 度 50 分にかけて広がる地域であり、面積はおよそ 3600 平方キロである。Søren Hvalkof & Hanne Veber, “Los Ashéninka del Gran Pajonal.” en Fernando Santos y Frederica Barclay editores, *Guía etnográfica de la Alta Amazonía* (Volumen V Campa Rebereños Ashéninka), Lima: Smithsonian Tropical Research Institute, IFEA, 2005), p. 90.
- 2) フアン・サントス・アタワルパはクスコのイエズス会が運営するカシケ養成学院で教育を受けており、スペイン語、ケチュア語、セルバの原住民語ができたという。Jay Frederick Lehnertz, “Lands of the Infidels: the Franciscans in the Central Montaña of Peru, 1709–1824.”, Madison: Ph.D. dissertation of University of Wisconsin, 1974, p. 122./クスコからキノパンゴへは河川を利用して到着したと考えられている。アプリマック川 (Río Apurímac) ~エネ川 (Río Ene) ~タンボ川 (Tambo) 経由で来たとの説が有力である。
- 3) Alonzo Zarzar, “*Apo Capac Huayna, Jesús Sacramentado*” *mito, utopía y milenarismo en el pensamiento de Juan Santos Atahualpa*, Lima: Ediciones de Centro Amazónico de Antropología y Aplicación Práctica, 1989, p. 59.
- 4) Francisco Loayza, *Juan Santos, el invencible*, Lima: Los pequeños grandes libros de la historia americana, 1942, p. 2, p. 7./Stéfano Varese, *La sal de los cerros (Una aproximación al mundo campá)*, Lima: Fondo Editorial del Congreso. reeditado por Retablo de Papel, 1973, p. 177./Zarzar, *op.cit.*, p. 45.
- 5) Gustavo Faverón Patriau, *Rebeldes, sublevaciones indígenas y naciones emergentes en Hispanoamérica en el siglo XVIII*, Madrid: Editorial Tecnos, 2006, p. 85.
- 6) Varese, *op.cit.*, p. 182./Alberto Flores Galindo, *Buscando un inca: identidad y utopía en los Andes*, Lima: Editorial Horizonte, 1988, p. 110.
- 7) Varese, *op.cit.*, pp. 183–184.
- 8) Michael F. Brown and Eduardo Fernández, *War of Shadows the Struggle for Utopia in the Peruvian Amazon* (Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1991, p. 32.
- 9) Fernando Santos Granero, “Paisajes sagrados arahuacos: nociones indígenas del territorio en tiempos de cambio y modernidad.” en *Revista Andina*, Número 42, primer semestre del 2006, p. 110./Mario Castro Arenas, *La rebelion de Juan Santos*, Lima: Carlos Milla Batres, 1973, p. 11, p. 15./18 世紀に氏名不詳のフランシスコ会士が描いたフアン・サントスの人物画が残されている。1997 年に筆者はオコパ修道院を訪問したが、そこでフアン・サントスの人物画を見かけた。
- 10) 「アシャニカ」とは「わが同朋」の意味。「アシェニカ」とは、とくに方言の異なるグラン・パホナールに居住するアシャニカを指す。「カンパ (人)」は、1651 年 5 月にスペイン人フェルナンド・コントララスによって命名された。“camparites”という地名に由来する。アシャニカのおおよその居住区域などを含めて詳しくは、Gerald Weiss, “Los campá ribereños.” en Fernando Santos y Frederica Barclay editores, *Guía etnográfica de la Alta Amazonía* (Volumen V Campa Rebereños Ashéninka), Lima: Smithsonian Tropical Research Institute, IFEA, 2005, pp. 5–6, p. 8./Hvalkof & Veber, *op.cit.*, p. 103 参照。
- 11) Flores Galindo, *op.cit.*, p. 104./Angel Barral Gómez, *Rebeliones indígenas en la América española*, Madrid: Editorial MAPFRE, 1992, pp. 195–196.

- 12) Brown and Fernández, *op.cit.*, p. 32./José Amich, *Historia de las misiones del Convento de Santa Rosa de Ocoña*, Lima: Edición crítica, introducción e índices: Julián Heras. CONCYTEC, 1988, p. 167.
- 13) Loayza, *op.cit.*, pp. 1–2./Brown and Fernández, *op.cit.*, p. 43./Varese, *op.cit.*, pp. 181–182./Castro Arenas, *op.cit.*, p. 10, p. 13, p. 15.
- 14) Loayza, *op.cit.*, p.IX, p. 2, p. 50./Lehnertz (1974), *op.cit.*, p. 123, p. 125./Zarzar, *op.cit.*, pp. 33–34./Castro Arenas, *op.cit.*, p. 18.
- 15) 「フアン・サントス・アタワルパ」という名前のうちの「フアン」は、1533年にインカ王アタワルパがその処刑に先だって洗礼を施されたときに与えられた洗礼名「フアン」に偶然一致する。
- 16) Steve J. Stern, “The Age of Andean Insurrection, 1742–1782: A Reappraisal.” Steve J. Stern (edited by), *Resistance, Rebellion, and Consciousness in the Andean Peasant World 18th to 20th Centuries* (Madison: The University Wisconsin Press, 1987), p. 43.
- 17) *Ibid.*, pp. 43–44.
- 18) シエラ中央部とは、リマ大司教区に所属するワヌコ、タルマ、ハウハ、ワンタ、カンタ、ワロチリ、ヤウヨス、アングラエス8地方の山岳部をさすが、とくに北から南にかけてワヌコ、タルマ、ハウハ、ワンタ4地方の山岳部がフアン・サントスの反乱拠点となった中央セルバと直接対峙した。*Ibid.*, pp. 41–42 参照。各地域の詳細はペルー国土地理院発行の県別地図参照。
- 19) 第29代ペルー副王ピリャガルシア侯 (José Antonio de Mendoza, Caamaño y Sotomayor, Marqués de Villagarcía. 在位 1736~1745) の命による。José A.Manso de Velasco, *Relación y documentos de gobierno del virrey del Perú, José A. Manso de Velasco, Conde de Superunda (1745~1761)* (Introducción, edición, notas e índice de Alfredo Moreno Cebrián) (Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas Instituto “Gonzalo Fernández de Oviedo”, 1983), p. 60.
- 20) *Ibid.*, pp. 61–62.
- 21) Stern, *op.cit.*, p. 43.
- 22) Loayza, *op.cit.*
- 23) P.Fr.Bernardino Izaguirre, OFM, *Historia de las misiones franciscanas en el Oriente del Perú* (Tomos I y II) (Nueva edición preparada y anotada por el P.Fr.Félix Sáiz Díez, OFM, Volumen I, 1619~1767) (Lima, 2002).
- 24) Stern, *op.cit.*, pp. 34–37./パブロ・マセラは最新の著書で、「フアン・サントス・アタワルパの出現とその(抵抗運動の)成功は、ペルー副王領当局の地政学的システム (el sistema geopolítico) がアマゾン川流域の現実に直面したことによって生じた困難と結びついていた」と述べている。Pablo Macera (Estudio Histórico)/Enrique Casanto (Tradiciones Ashánincas), *El poder libre Asháninka Juan Santos Atahualpa y su hijo Josecito* (Lima: Universidad de San Martín de Porres, Fondo Editorial, 2009), p. 9.
- 25) フアン・サントスの反乱についての最古の記録はフランシスコ会士のクロニスタ (年代記者) によって書かれた (ホセ・アミッチ, ベルナルディーノ・イサギーレら)。反乱の研究が行われるのは大分後のことである。1940年代にカルロス・ロメロとフランシスコ・ロアイサによって史料が編纂された。研究書の刊行はさらに後の1970年代に入ることである。これは、ペルー領アマゾン川源流域の開発に衆目が集まり始めたことと関係している。ステファノ・バレセ, マリオ・カストロ・アレナス, オレリャーナらの書物や論文が刊行された。その後研究が深化され、本文に記した研究者の他, レーネルツ・ジャイ・フレデリック, ソイラ・メンドーサ, アロンソ・サルサル, サラ・マテオス, アルトゥーロ・エンリケ・デ・ラ・トーレ, スカーレット・オフエラン・ゴドイ, ルイス・ミゲル・グラバーらの研究者が出現した。Flores Galindo, *op.cit.*,

- p. 96./Macera y Casanto, *op.cit.*, p. 12./Luis Miguel Glave, “El Apu Ynga camina de nuevo Juan Santos Atahualpa y el asalto de Andamarca en 1752.” en *Perspectivas Latinoamericanas*, Número 6, Año 2009, pp. 30–36.
- 26) 友枝啓泰「18世紀半ばにおけるペルー中央モンターニャにおける原住民の反乱」(『アジア・アフリカにおける宗教運動』共同研究報告〔III〕, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1973年) 34–50頁。
- 27) 近年パブロ・マセラとエンリケ・カサントによって, アシャニンカから聞き取り調査が行われた。その結果, 次のようなことが解った。アシャニンカはフアン・サントス・アタワルパを「ホバ・サントシ・アタアリバ (Jová Santoshi Aaaripa)」と呼び, 戦いの長老として畏敬の念を抱いた。妻はマルティナ・マルケス・スマエタ (Martina Márquez Zumaeta) であり, 「シュマイテリ (Shumaiteri)」という名前のアシャニンカ人の娘であった。アシャニンカは彼女をマリシナ・マリキシ・シュマイテリ (Marizina Marikishi Shumaiteri) と呼ぶ。彼女はクスコの修道院で育てられた。この夫婦から7人の子供が生まれた。全員の名は不明であるが, このうち「ホセシート (Josecito)」〔本名はホセ・サントス・マルケス (José Santos Márquez)〕という名の障害をもった息子がおり, フアン・サントスの後継者となった。この家族は元々クスコの中心部で暮らしていた。フアン・サントスの父親はホセ・サントス・シェンカリ (José Santos Shencari), 母親はマリア・アタワルパ・コヤ (María Atahualpa Coya) である。また曾祖父・曾祖母の名前も知られている。今日アシャニンカは, フアン・サントスとホセシート・サントスについていろいろと語る。フアン・サントスとその息子の戦いはアシャニンカをスペイン人の手から解放するためであったし, またシエラの原住民を解放するためでもあったと述べる。フアン・サントスは, アシャニンカ, アムエシャ, ピロ, クニボ (コニボ), ノマチゲング, マチゲングなど中央セルバの多民族原住民を統合して戦った。反乱者たちは大きな軍事組織をつくった。彼らは弓矢で武装し, 兵員を募るために各家庭を訪れ家長を説得した。原住民の自由と権利を守るために多くの男女が命を投げ出した。またシエラの原住民の一部がこれに合流した。彼らの武器は投石器であった (200年以上が過ぎた今でもアシャニンカはこれらのことをよく覚えていた)。Macera y Casanto, *op.cit.*, p. 33, p. 79 参照。
- 28) 拙稿「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察—ペルー日本大使公邸占拠事件の本質的問題の究明にむけて— (その1)」〔『神戸商科大学創立80周年記念論文集』(2009年) 500–501頁。Fernando Santos Granero, “Anticolonialismo, mesianismo y utopía en la sublevación de Juan Santos Atahualpa, siglo XVIII.” En *DATA, Revista del Instituto de Estudios Andinos y Amazónicos*, No.4(La Paz: Instituto de Estudios Andinos y Amazónicos, 1993), pp. 133–134.
- 29) 拙著『トゥパック・アマルの反乱に関する研究—その社会経済史的背景の考察—』(神戸商科大学研究叢書LI, 神戸商科大学経済研究所, 1995年) 141頁。
- 30) これらの各地帯の生態学的環境については, Fernando Santos Granero, Frederica Barclay Rey de Castro, *Ordenes y desórdenes en la Selva Central, historia y economía de un espacio regional*(Lima: IEP, IFEA: Instituto Francés de Estudios Andinos, 1995), pp. 217–220 参照。/ 現バスコ県に位置するバルカス川はポスソ川に注ぎ, ポスソ川とピチス川はバチテア川に注ぐ。そしてバチテア川はウカヤリ川に注ぐ。
- 31) アシャニンカ, アムエシャ (ヤネシャともいう。大半がオクサパンバ溪谷に居住), マチゲング (Machiguenga), ピロ (Piro), ノマチゲング (エネ川左岸, バンゴア, サニベニ, アナパティ, キアタニに居住) などが有名である。
- 32) 1680年代半ばに「カンパ」なる名称が一般化した。Brown and Fernández, *op.cit.*, pp. 17–18.
- 33) ペレネ川下流域やタンボ川流域, グラン・パホナル台地ではとくに「アシェニンカ (Ashéninca)」



と呼ばれるが、本稿では、とくに支障のないかぎりその名称を「アシャニンカ (Asháninka)」に統一する。また「アシャニンカ」なる用語を「アシャニンカ人」、「アシャニンカ社会 (共同体)」などの広い意味で用いることにする。他のアラワク系原住民やその社会 (共同体) の名称に関してもこの方式に従いたい。

- 34) セルバの一部であるが、アンデス東斜面で比較的高度の高い部分の名称。
- 35) 中央セルバのうち現フニン県のセルバ地域に住む住民の歴史や貧困問題については、前掲拙稿「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題… (その1)」と拙稿「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察—ペルー日本大使公邸占拠事件の本質的問題の究明にむけて— (その2)」『人文論集』第45巻 (兵庫県立大学, 2010年) 参照。ペルー・アマソニア全域の民族集団の概要は、Alejandro Ortiz Rescaniere, *Manual de etnografía amazónica* (Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, 2001), p. 48 参照。
- 36) Hvalkof & Veber, *op.cit.*, p. 84./Fernando Santos Granero, “Epidemias y sublevaciones en el desarrollo demográfico de las misiones Amuesha del Cerro de la Sal, siglo XVIII.” en *Histórica*, Vol. XI, No. 1, Julio de 1987, p. 30.
- 37) その他詳細は、フニン県の地図 (Departamento de Junín, mapa físico político, escala 1:450000) (Lima: Instituto Geográfico Nacional, 1981) 参照。
- 38) Brown and Fernández, *op.cit.*, p. 18./Hvalkof & Veber, *op.cit.*, p. 82./Izaguirre, *op.cit.*, p. 188.
- 39) Santos Granero, “Paisajes sagrados...”, pp. 105–108.
- 40) Hvalkof & Veber, *op.cit.*, p. 119./Flores Galindo, *op.cit.*, pp. 96–97 参照。
- 41) Santos Granero, Barclay, *Ordenes y desórdenes...*, p. 33.
- 42) Fernando Santos Granero, “Las fronteras son creadas para ser transgredidas: magia, historia y política de la antigua divisoria entre Andes y Amazonía en el Perú.” en *Histórica*, XXIX, 1 (2005), pp. 122–123.
- 43) 周辺地域である中央セルバの原住民への布教は各派修道会が受け持った。ペルー副王領における「教権」の動向、とくに各派修道会による布教活動から司教区・教区組織の設立に至る流れや、「レグラール」(clero regular, 各派修道会士) と「セクラール」(clero secular, 司教や司祭など世俗レベルにおける聖職者) の関係等については、拙稿「16世紀ペルーにおけるスペイン植民地支配体制の成立をめぐる」(『人文論集』第39巻, 第3・4号, 神戸商科大学学術研究会, 2004年) 328–330頁参照。このほか、植民地時代ペルーの宗教問題に詳しい谷口智子氏による宣教スタイルに関する説明も示唆に富む。「宣教スタイルは2通りあり, 1つは大都市を中心とする司教区・教区組織の設立であり, もう1つは, 周辺地域における修道会による改宗区の設立である」と述べている。谷口智子『新世界の悪魔 カトリック・ミッションとアンデス先住民宗教』(大学教育出版, 2007年) 28頁。
- 44) ワヌコ市は7つの地方 (ハウハ, タルマ, ワマリエス, カハタンボ, コンチュコス, ワイラス, パナタワス) の首都となる。1714～1718年に流行した伝染病 (ペスト) を契機にワヌコ市は衰退した。Izaguirre, *op.cit.*, pp. 97–99./Antolín Abad Pérez, *Los franciscanos en América* (Madrid: Editorial MAPFRE, 1992), p. 195.
- 45) *Ibid.*, p. 196./Izaguirre, *op.cit.*, p. 100.
- 46) Rescaniere, *op.cit.*, p. 36.
- 47) Izaguirre, *op.cit.*, p. 226.
- 48) Santos Granero, Barclay, *Ordenes y desórdenes...*, pp. 33–34. 北部セルバや南部セルバでは16世紀からすでに町ができていた。例えば、北部セルバでは、ハエン・デ・ブラカモロス (Jaén de Bracamoros. 当時既に33のエンコミエンダが存在した) が1536年に設立され, 続いてサ

- ンティアゴ・デ・ロス・オチョ・バリエス・デ・モヨバンバ (Santiago de los Ocho Valles de Moyobamba) が1540年に設立されている。南部セルバではサン・フアン・デル・オロ (San Juan del Oro) が1540年から1553年の間に建立されていた。
- 49) キミリは、現フニン県チャンチャマヨ郡の北部ラ・メルセ (La Merced) の位置にあたる。
- 50) Izaguirre, *op.cit.*, pp. 185–186, pp. 203–204./Abad Pérez, *op.cit.*, p. 199./Federico Richter Prada, O.F.M., “Los franciscanos en la evangelización del Perú, siglo XVI.” en *Revista Peruana de Historia Eclesiástica*, 2 (Cuzco, 1992), p. 54.
- 51) Amich, *op.cit.*, pp. 59–60./Izaguirre, *op.cit.*, p. 221./Castro Arenas, *op.cit.*, p. 57.
- 52) Hvalkof & Veber, *op.cit.*, p. 113./ビエドマ神父の略歴や事績については、Izaguirre, *op.cit.*, pp. 227–229, pp. 279–286 参照。
- 53) *Ibid.*, pp. 197–199./Rescaniere, *op.cit.*, p. 36./Weiss, *op.cit.*, p. 9./Hvalkof & Veber, *op.cit.*, p. 118.
- 54) 1644年にセロ・デ・ラ・サルには4人の修道士がいたが、その後全員が同地から立ち去ったという。Izaguirre, *op.cit.*, p. 222. 参照。
- 55) Abad Pérez, *op.cit.*, pp. 199–200./Izaguirre, *op.cit.*, p. 258./Castro Arenas, *op.cit.*, p. 59.
- 56) フランシスコ・デ・サン・ホセ (ホセフ) はメキシコや中米で長期にわたって布教活動を行った経験があった。1708年からペルー各地を探索した後、1725年にオコパに修道院を築くことになった。当修道院を建設中にチャンチャマヨ、ベレネ、パンゴアのミッションが修復された。また1726年にはパンパス・デル・サクラメント (Pampas del Sacramento. ポスソ川からウカヤリ川にかけての一带) が、そして1732年にはグラン・パホナールがそれぞれ見いだされた。エネ川、タンボ川、ウカヤリ川上流の廻行が行われ、そうした地方全域で布教・伝道が開始された。以来、オコパ修道院はスペイン領アメリカにおいて最も重要なミッション中枢の一つとなった。オコパ修道院は現フニン県コンセプシオン郡 (ワンカヨの北25キロ) に位置する。現在、関連の蔵書2万5000冊を擁する。Departamento de Creación Editorial de Lexus Editores, *Gran enciclopedia del Perú* (Barcelona: Lexus Editores, 1998), p. 528./Amich, *op.cit.*, pp. 11–12, pp. 200–201./Izaguirre, *op.cit.*, pp. 421–423./Castro Arenas, *op.cit.*, pp. 67–68, pp. 70–71 参照。
- 57) Santos Granero, “Las fronteras...”, p. 112.
- 58) Armando Nieto Velez, S.J., “Las misiones en los jesuitas del Perú.” en *Revista Peruana de Historia Eclesiástica*, 2 (Cuzco, 1992), p. 198.
- 59) Santos Granero, “Las fronteras...”, pp. 114–115.
- 60) *Ibid.*, pp. 115–117.
- 61) *Ibid.*, p. 119.
- 62) アメリカの先住民は、旧大陸の伝染病である天然痘、麻疹 (はしか)、インフルエンザ、チフス、ジフテリア、マラリア、おたふく風邪、百日咳、ペスト、結核、黄熱病などに対して抵抗力を持たなかった。ジャレド・ダイヤモンド著 (倉骨彰訳), 『銃・病原菌・鉄』(上) (草思社, 2000年/2010年) 313頁。
- 63) *Ibid.*, pp. 118–119.
- 64) Izaguirre, *op.cit.*, p. 424. ワヌコ改宗区にはホセ・サンチェス修道士 (Fr.José Sánchez) とホセ・ジル・ムーニョス修道士 (Fr.José Gil Muños) が、タルマ改宗区にはペドロ・ポンス修道士 (Fr. Pedro Pons) とマリアノ・バディア修道士 (Fr.Mariano Badía) が、ハウハ改宗区にはマヌエル・バホ修道士 (Fr.Manuel Bajo) とアロンソ・デル・エスピトゥ・サント修道士 (Fr.Alonso del Espíritu Santo) がそれぞれ配置された。
- 65) Zarzar, *op.cit.*, p. 27.
- 66) Izaguirre, *op.cit.*, pp. 429–435.

- 67) Santos Granero, "Epidemias y sublevaciones...", p. 40./Lehnertz, "Lands of the Infidels...", p. 62.
- 68) Izaguirre, *op.cit.*, pp. 443. グラン・パホナールは、タンボ川、ペレネ川、ピチス川の間に位置する高地である。複雑な自然条件に阻まれアクセスは困難である。当地に住むアシャニカの生存経済は現在でも狩猟・採集と焼畑農耕を組み合わせた自給自足的なものである。主食は焼畑で栽培したユカイモである。
- 69) *Ibid.*, pp. 444 – 445./Varese, *op.cit.*, p. 172./Hvalkof & Veber, *op.cit.*, pp. 114 – 115, p. 117.
- 70) *Ibid.*, p. 116./Varese, *op.cit.*, p. 173.
- 71) Zarzar, *op.cit.*, p. 25.
- 72) Santos Granero, "Anticolonialismo...", pp. 146 – 148.
- 73) John V. Murra, *El mundo andino población, medio ambiente y economía*(Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, IEP, 2002), p. 82 と p. 83 の間に挿入されている地図参照。またイニーゴ・オルティス (Iñigo Ortiz) の巡察に関する文書からの情報については, pp. 88 – 94 参照。
- 74) Santos Granero, "Las fronteras...", pp. 120 – 122.
- 75) Santos Granero, "Anticolonialismo...", p. 138.
- 76) コカは鉱山労働者の食品として、プーナの鉱山開発を維持するうえで不可欠の品であった。Zarzar, *op.cit.*, p. 32.
- 77) 詳しくは, Santos Granero, "Anticolonialismo...", pp. 136 – 137, p. 139./Loayza, *op.cit.*, p. 229 参照。
- 78) Santos Granero, "Anticolonialismo...", p. 138.
- 79) Faverón Patriau, *op.cit.*, pp. 95 – 96./Santos Granero, "Anticolonialismo...", p. 137 参照。
- 80) *Ibid.*, p. 137, p. 139.
- 81) Santos Granero, Barclay, "Ordenes y desórdenes...", p. 26. 現パスコ県に位置した。
- 82) とくに植民地時代末期ペルー副王領においてセロ・デ・パスコ銀山の銀生産は絶頂に達する。Magdalena Chocano, "Circuitos mercantiles y auge minero en la sierra central a fines de la época colonial." en *Allpanchis*, Vol.XVIII, No.21(Cusco, 1983), p. 3./John Fisher, *Minas y mineros en el Perú colonial 1776 – 1824*(Lima:Instituto de Estudios Peruanos, 1977), pp. 213 – 214, 222 – 223.
- 83) セロ・デ・パスコ銀山は標高 4359 メートルの高所に位置し寒冷であって、その労働環境は最悪であった。ワスコからセロ・デ・パスコまでの距離は 22 レグア。詳しくは, Izaguirre, *op.cit.*, p. 95, p. 97, p. 104 参照。
- 84) Fisher, *op.cit.*, pp. 29 – 33. 詳しくは, Cuadro 2 と Cuadro 3 参照。その他, Bernaldo Lavallé, Consuelo Naranjo y Antonio Santamaría, *La América española (1763 – 1898) economía*(Madrid: Editorial Síntesis, S.A., 2002), pp. 22 – 23 参照。
- 85) Chocano, *op.cit.*, p. 5.
- 86) セロ・デ・パスコ税関に登録された流入商品の中で輸入品は平均して全体の 44% を占めたとの報告がある。*Ibid.*, p. 7.
- 87) ワンカベリカからセロ・デ・パスコへの水銀輸送は王立トラヒン (Real Trajín) の御用商人 (asentista) の手で行われた。*Ibid.*, p. 7.
- 88) 商品は陸路ではラバの隊商隊によって輸送された。ラバ 1 頭当たりの積載重量はおよそ 3 キンタル。1 キンタルは約 46 キログラムゆえ、1 頭のラバが運び得た品物の重量限界は 138 キロまでである。ラバ 10 頭 ~ 12 頭からなる隊商隊の場合、1 人のアリエロと 2 人の助手がついた。*Ibid.*, pp. 6 – 7. コカは換金作物として原住民が銀 (現金) や家畜を入手するうえで最良の品であった。
- 89) 拙著 (1995 年), 144 – 145 頁。
- 90) 現物支払いの内容は、衣類、家畜、トウモロコシ、小麦、ジャガイモによる。ペルー副王領全域において貢納の現金支払いが義務づけられたのは 1698 年のことであった。Carmen Arellano

- Hoffmann, *Apuntes históricos sobre la Provincia de Tarma en la sierra central del Perú, el kuraka y los ayllus bajo la dominación colonial española, siglos XVI–XVIII* (Bonn: Bonner Amerikanistische Studien, 1988), p. 172. 参照。
- 91) 拙稿「植民地時代ペルーにおけるワンカベリカ水銀鉱山と水銀汚染問題—植民地時代前半期—」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』(No.6) (京都外国語大学, 2006年) 参照。
- 92) レパルティミエントが法制化されたのは1754年のこと。拙著 (1995年), 146頁, 153–156頁。Stern, *op.cit.*, pp. 39–40.
- 93) Alfredo Moreno Cebrián, *El corregidor de indios y la economía peruana del siglo XVIII (los repartos forzosos de mercancías)* (Madrid: CSIC, 1977), pp. 350–351.
- 94) 拙著 (1995年), 158頁。
- 95) 「生態学的階床」とは、アンデス研究における「垂直統御」学説に基づく考え。「垂直統御」とは、正確には「アンデス社会の経済における生態学的階床の最大限垂直統御 (el control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas)」という。John V. Murra, *The Economic Organization of the Inca State* (Greenwich: JAI Press, 1980)./John V. Murra, “El control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas.” en tomo II de *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562* por Inigo Ortiz de Zúñiga (Huánuco: Universidad Nacional Hermilio Valdizan, 1972) 参照。
- 96) Hoffmann, *op.cit.*, p. 159, p. 162, p. 246.
- 97) 各地帯の海拔高度の表示数値は「プルガール・ビダルの8地帯区分」に基づく。マリア・ロストウォーフスキ著 (増田義郎訳) 『インカ国家の形成と崩壊』(東洋書林, 2003年) p.v. 参照。
- 98) *Ibid.*, pp. 161–163.
- 99) *Ibid.*, pp. 139–142.
- 100) *Ibid.*, pp. 142–143.
- 101) フォラステロは原住民に限ったことではない。メスティソ, ムラート, それに白人のフォラステロすら出現していたといわれる。*Ibid.*, pp. 143–144.
- 102) Santos Granero, Barclay, *Ordenes y desórdenes...*, p. 34.
- 103) Hoffmann, *op.cit.*, pp. 161–162.
- 104) Zarzar, *op.cit.*, p. 32.
- 105) Arturo E. de la Torre López, *Juan Santos Atahualpa* (Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, 2004), p. 47./Izaguirre, *op.cit.*, pp. 263–267./Santos Granero, “Anticolonialismo...”, p. 139.
- 106) Weiss, *op.cit.*, p. 10./Santos Granero, “Anticolonialismo...”, p. 139.
- 107) Santos Granero, “Epidemias y sublevaciones...”, p. 33.
- 108) *Ibid.*, p. 35.
- 109) *Ibid.*, p. 36.
- 110) *Ibid.*, p. 37.
- 111) *Ibid.*, p. 39. 1722年には1万1000人から1万2000人くらいの洗礼を授けられた原住民の子供が死亡したといわれる。Alberto Flores Galindo, “La chispa y el incendio: Juan Santos Atahualpa.” en Alberto Flores Galindo, *OBRAS COMPLETAS III(I)* (Lima: Sur Casa de Estudios del Socialismo, 2005), p. 105.
- 112) Izaguirre, *op.cit.*, p. 449.
- 113) Santos Granero, “Epidemias y sublevaciones...”, p. 40.
- 114) *Ibid.*, pp. 41–42./Santos Granero, “Anticolonialismo...”, pp. 139–140./Flores Galindo, “La

- chispa...”, pp. 105 – 106.
- 115) Zarzar, *op.cit.*, p. 31.
- 116) これ以外にも反乱は頻繁に起きていた。キミリ：1637年, 1642年, 1694年, ピチャナ：1674年, 1719年, 1721年, タンボ川：1687年, ヘスス・マリア：1724年, ソノモロ：1737年である。反抗の動機としては伝染病の流行以外にも理由がいくつかあった。例えば, 宣教師による一夫多妻の禁止, 様々な強制, 「反抗的な」原住民への懲罰, 集住政策などである。Hvalkof & Veber, *op.cit.*, p. 120.
- 117) Zarzar, *op.cit.*, p. 33.
- 118) Santos Granero, Barclay, *Ordenes y desórdenes...*, p. 37.
- 119) Weiss, *op.cit.*, p. 10. 「フアン・サントス・アタワルパ」という名前のうち, 「サントス」は「三位一体 (trinidad. 父と子と精霊)」の最後の名称「精霊なる神 (Espíritu Santo)」であり, 「アタワルパ」はスペイン人征服者によって1533年に処刑されたインカ王を示す。また「アップ・インカ」の象徴の一つは, 「大地を揺るがす能力」の所持である。事実, フアン・サントスの反乱が開始されて4年後の1746年10月28日午前に大地震がリマを直撃し, 大きな被害が出た。副王の住む宮殿や教会の大半が瓦解した。カヤオでの被害も大きかった。津波がチャンカイなど海岸部の溪谷地帯に押し寄せたという。そのために, フアン・サントスには大地を揺るがす能力があるとされ, スペイン人を追放しインカを建設するために天から使われた人として彼に対する脅威が煽られた。11月に入ると当局者によって書かれた1通の手紙が, 中央セルバの布教・伝道を担うフランシスコ会士のもとに届けられ, その中ではこの自然現象とフアン・サントスとの奇妙な関係が語られていた。Flores Galindo, “La chispa...”, pp. 99–101. この大地震 (とその影響) についてはいくつかの研究がある。
- 120) フローレス・ガリンドは, 反乱軍に参加した高地人数名の具体例を挙げている。 *Ibid.*, p. 98.

## 参考文献

谷口智子

2007 『新世界の悪魔 カトリック・ミッションとアンデス先住民宗教』, 大学教育出版。

ダイヤモンド, ジャレド

2010 『銃・病原菌・鉄』(上, 下), 倉骨彰訳, 草思社。

友枝啓泰

1973 「18世紀半ばにおけるペルー中央モンターニャにおける原住民の反乱」, 『アジア・アフリカにおける宗教運動』共同研究報告〔III〕, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 34–50頁。

真鍋周三

1995 『トゥパック・アマルの反乱に関する研究—その社会経済史的背景の考察—』, 神戸商科大学研究叢書 LI, 神戸商科大学経済研究所。

2004 「16世紀ペルーにおけるスペイン植民地支配体制の成立をめぐる」, 『人文論集』, 第39巻, 第3・4号, 神戸商科大学, 297–347頁。

2006 「植民地時代ペルーにおけるワンカベリカ水銀鉱山と水銀汚染問題—植民地時代前半期—」,

- 『京都ラテンアメリカ研究所紀要』, No.6, 京都外国語大学, 19-55 頁。
- 2009 「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察—ペルー日本大使公邸占拠事件の本質的問題の究明にむけて—(その1)」, 『神戸商科大学創立80周年記念論文集』, 兵庫県立大学, 495-520 頁。
- 2010 「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察—ペルー日本大使公邸占拠事件の本質的問題の究明にむけて—(その2)」, 『人文論集』, 第45巻, 兵庫県立大学, 1-21 頁。

ロストウォロフスキ, マリア

- 2003 『インカ国家の形成と崩壊』, 増田義郎訳, 東洋書林。

Abad Pérez, Antolín

- 1992 *Los franciscanos en América*, Editorial MAPFRE, Madrid.

Amich, José

- 1988 *Historia de las misiones del Convento de Santa Rosa de Ocoña*, Edición crítica, introducción e índices por Julián Heras, CONCYTEC, Lima.

Brown, Michael F. and Eduardo Fernández

- 1991 *War of Shadows the Struggle for Utopia in the Peruvian Amazon*, University of California Press, Berkeley, Los Angeles, London.

Castro Arenas, Mario

- 1973 *La rebelión de Juan Santos*, Carlos Milla Batres, Lima.

Chocano, Magdalena

- 1983 “Circuitos mercantiles y auge minero en la sierra central a fines de la época colonial”, *Allpachis*, Vol.XVIII, No.21, pp. 3-26.

Departamento de Creación Editorial de Lexus

- 1998 *Gran enciclopedia del Perú*, Lexus Editores, Barcelona.

Faverón Patriau, Gustavo

- 2006 *Rebeldes, sublevaciones indígenas y naciones emergentes en Hispanoamérica en el siglo XVIII*, Editorial Tecnos, Madrid.

Fisher, John

- 1977 *Minas y mineros en el Perú colonial 1776-1824*, IEP (Instituto de Estudios Peruanos), Lima.

Flores Galindo, Alberto

- 1988 *Buscando un inca: identidad y utopía en los Andes*, Editorial Horizonte, Lima.

- 2005 “La chispa y el incendio: Juan Santos Atahualpa”, *Alberto Flores Galindo OBRAS COMPLETAS III (I)*, pp. 93-107, Sur Casa de Estudios del Socialismo, Lima.

Golte, Jürgen

1980 *Repartos y rebeliones Túpac Amaru y las contradicciones de la economía colonial*, IEP, Lima.

Gómez, Ángel Barral

1992 *Rebeliones indígenas en la América española*, Editorial MAPFRE, Madrid.

Hoffmann, Carmen Arellano

1988 *Apuntes históricos sobre la Provincia de Tarma en la sierra central del Perú, el kuraka y los ayllus bajo la dominación colonial española, siglos XVI–XVIII*, Bonner Amerikanistische Studien, Bonn.

Hvalkof, Søren & Hanne Veber

2005 “Los Ashéninka del Gran Pajonal”, *Guía etnográfica de la Alta Amazonía* (Volumen V Campa Rebereños Ashéninka), Santos Granero, Fernando y Frederico Barclay Rey de Castro editores, pp. 75 – 279, Smithsonian Tropical Research Institute, IFEA(Instituto Francés de Estudios Andinos), Lima.

Izaguirre, P.Fr.Bernardino

2002 *Historia de las Misiones Franciscanas en el Oriente del Perú* (Tomos I,II), Nueva edición preparada y anotada por el P.Fr.Félix Sáiz Díez, Volumen I(1619 – 1767), Lima.

Lehnertz, Jay Frederick

1974 “Lands of the Infidels: the Franciscans in the Central Montaña of Peru, 1709 – 1824”, Ph.D. dissertation of University of Wisconsin, Madison.

Lavallé, Bernaldo, Consuelo Naranjo y Antonio Santamaría

2002 *La América española (1763 – 1898) economía*, Editorial Síntesis, Madrid.

Loayza, Francisco

1942 *Juan Santos, el invencible*, Los pequeños grandes libros de la historia americana, Lima.

Macera, Pablo, Enrique Casanto

2009 *El poder libre Asháninka Juan Santos Atahualpa y su hijo Josecito*, Universidad de San Martín de Porres, Fondo Editorial, Lima.

Manso de Velasco, José A.

1983 *Relación y documentos de gobierno del virrey del Perú, José A. Manso de Velasco, Conde de Superunda (1745 – 1761)*, Introducción, edición, notas e índice de Alfredo Moreno Cebrián, Consejo Superior de Investigaciones Científicas Instituto “Gonzalo Fernández de Oviedo”, Madrid.

Miguel Glave, Luis

2009 “El Apu Ynga camina de nuevo Juan Santos Atahualpa y el asalto de Andamarca en 1752”,

*Perspectivas Latinoamericanas*, Número 6, pp. 28 – 68.

Moreno Cebrián, Alfredo

1977 *El corregidor de indios y la economía peruana del siglo XVIII (los repartos forzosos de mercancías)*, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid.

Murra, John V.

1972 “El control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas”, *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562* (tomo II) por Iñigo Ortiz de Zúñiga, Universidad Nacional Hermilio Valdizan, Huánuco, pp. 429 – 476.

1980 *The Economic Organization of the Inca State*, JAI Press, Greenwich.

2002 *El mundo andino población, medio ambiente y economía*, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, IEP, Lima.

Nieto Velez, Armando, S.J.

1992 “Las misiones en los jesuitas del Perú”, *Revista Peruana de Historia Eclesiástica*, 2, Cuzco, pp. 191 – 210.

Prada, Federico Richter, O.F.M.

1992 “Los franciscanos en la evangelización del Perú, siglo XVI”, *Revista Peruana de Historia Eclesiástica*, 2, Cuzco, pp. 53 – 90.

Rescaniere, Alejandro Ortiz

2001 *Manual de etnografía amazónica*, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima.

Santos Granero, Fernando

1987 “Epidemias y sublevaciones en el desarrollo demográfico de las misiones Amuesha del Cerro de la Sal, siglo XVIII”, *Histórica*, Vol.XI, No.1, pp. 25 – 54.

1993 “Anticolonialismo, mesianismo y utopía en la sublevación de Juan Santos Atahualpa, siglo XVIII”, *DATA, Revista del Instituto de Estudios Andinos y Amazónicos*, No.4, Instituto de Estudios Andinos y Amazónicos, La Paz, pp. 133 – 152.

2005 “Las fronteras son creadas para ser transgredidas: magia, historia y política de la antigua divisoria entre Andes y Amazonía en el Perú”, *Histórica*, Vol.XXIX, No.1, pp. 107 – 148.

2005 “San Cristóbal en la Amazonía: colonialismo, violencia y hechicería infantil entre los arahuacos de la selva central del Perú”, *Anthropologica* (del Departamento de Ciencias Sociales de la Pontificia Universidad Católica del Perú), Año XXIII, No.23, pp. 43 – 80.

2006 “Paisajes sagrados arahuacos: nociones indígenas del territorio en tiempos de cambio y modernidad”, *Revista Andina*, Número 42, pp. 99 – 124.

Santos Granero, Fernando, y Frederica Barclay Rey de Castro

1995 *Ordenes y desórdenes en la Selva Central, historia y economía de un espacio regional*, IEP, IFEA, Lima.



2005 *Guía etnográfica de la Alta Amazonía* (Volumen V Campa Rebereños Ashéninka), Smithsonian Tropical Research Institute, IFEA, Lima.

Stern, Steve J.

1987 “The Age of Andean Insurrection, 1742 – 1782: A Reappraisal”, pp. 34 – 93, *Resistance, Rebellion, and Consciousness in the Andean Peasant World 18th to 20th Centuries*, edited by Steve J. Stern, The University of Wisconsin Press, Madison.

Torre López, Arturo E. de la

2004 *Juan Santos Atahualpa*, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima.

Varese, Stéfano

1973 *La sal de los cerros (Una aproximación al mundo campá)*, Fondo Editorial del Congreso. reeditado por Retablo de Papel, Lima.

Weiss, Gerald

2005 “Los campá ribereños”, pp. 1 – 74, *Guía etnográfica de la Alta Amazonía* (Volumen V Campa Rebereños Ashéninka), Santos Granero, Fernando y Frederica Barclay Rey de Castro editores, Smithsonian Tropical Research Institute, IFEA, Lima.

Zarzar, Alonzo

1989 “*Apo Capac Huayna, Jesús Sacramentado*”, *mito, utopía y milenarismo en el pensamiento de Juan Santos Atahualpa*, Centro Amazónico de Antropología y Aplicación Práctica, Lima.

